

歴史学分野

歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ

(The Research Group for the Study of European Identity from
a Historical Perspective)

メンバー

服部良久 (京都大学大学院文学研究科教授・リーダー)

谷川 稔 (京都大学大学院文学研究科教授)

南川高志 (京都大学大学院文学研究科教授)

小山 哲 (京都大学大学院文学研究科助教授)

川島昭夫 (京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

杉本淑彦 (京都大学大学院文学研究科教授)

井野瀬久美恵 (甲南大学教授)

羽田 正 (東京大学教授)

羽場久 渥子 (法政大学教授)

原 聖 (女子美術大学教授)

松本悠子 (中央大学教授)

中村敦子 (京都大学非常勤講師)

宮坂康寿 (京都大学大学院文学研究科COE研究員・研究会補佐員)

佐久間大介 (京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

庄子大亮 (京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

橋川裕之 (京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

堀内隆行 (京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

研究会の趣旨

政治・経済・文化の諸次元における「グローバル化」の波をうけて、歴史研究者がこれまで暗黙の前提としてきた近代国民国家(あるいは近代歴史学)の価値観や枠組みが、今日深刻な動揺にさらされている。例

えば、ヨーロッパ連合の成立は、西洋史研究者が対象とする現実の歴史空間を大きく変容させた。このトランスナショナルな共同体はアイデンティティ複合（地域・国民国家・ヨーロッパ連合）の問題を顕在化させただけでなく、「彼らの内なる非ヨーロッパ的要素」との相克をいっそう深刻なものにしている。拡大EUという「複合的大地域」がはらむこれらの矛盾に関しては、すでに社会学や国際政治学からの同時代的・空間的分析があるが、歴史学の立場からはこれをいかに捉え返すことができるであろうか。例えば、古代史をはじめとする前近代史からは、各時代のリージョナル・ナショナル・トランスナショナルな結合のあり方を探り、近代以降にイメージされるヨーロッパ像を解釈し直すことも一つの方法である。また、今日の西洋史研究者が研究対象とする空間は、狭義のヨーロッパをはるかに超えた広領域にわたっており、これらの地域から「ヨーロッパの自己意識」を問い直すことは、西洋史研究の自己検証に不可欠な作業となる。

本研究は、非ヨーロッパ人という距離感覚を生かしつつ、また安直なオリエンタリズム批判にも陥ることなく、ヨーロッパ・アイデンティティの特質を捉えようとする。その際、今日のEU拡大と密接に結びついたヨーロッパ・アイデンティティや、その影響下に進められている新しいヨーロッパ史研究の動向を検討することのみならず、上に記したように、前近代の様々な時代、地域における多様なアイデンティティの重層的、複合的關係をも明らかにすることをめざす。このような多様なアイデンティティを規定する要因として具体的には、歴史意識、神話と伝承、言語マイノリティ、地域と国家の關係、人と物のトランスナショナルな動き、植民地と帝国、移民など、現代世界に連なる様々な問題をとりあげる。

研究遂行に際しては、狭義の西洋史以外の研究に従事するメンバーの参加により、ヨーロッパ史をその外部より捉え直すこと、ヨーロッパ人研究者との交流・共同研究をおこなうことにより、外国史研究としての本研究の意義を確認すること、グローバル化やアイデンティティについて新しい感覚を持つであろう大学院生など若手研究者をメンバーとして、また随時研究会参加者として加えることにつとめる。

本研究は、その成果をふまえて、最終的には21世紀にふさわしい世界史像の構築に向けた提言をおこなうことを目指すものである。

研究計画は以下の通りである。

〔平成14年度〕

研究会構成員以外にも広く研究協力者を得て11月初めに、「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」と題するシンポジウムを開催する。12月と翌年3月に研究会を開催し、シンポジウムにおいて明らかにされた問題点を整理・検討する。それによって、「研究目的」に記した問題設定が、古代、中・近世、近・現代の各地域において持ちうる意味を確認し、個々の研究会構成員の研究分担を設定する。また次年度における研究スケジュールをたて、同時に可能な分野から、具体的な研究を進めていく。その際、西洋史学専修所属研究会メンバーを中心とする小規模な研究打ち合わせは随時開催して、研究の方向を検討・確認し、研究成果の提示のあり方について立ち入った検討をおこなう。この中心メンバーは、文献・史料の情報収集につとめ、マイクロフィルムや映像資料等も含めた広範囲にわたる資・史料を収集し、研究会構成員全体の利用に供する。

〔平成15年度〕

前年度を受けて、研究会メンバーの個別の研究を深めるとともに、外国人研究者を招聘して、共同研究をおこなう。隔月に研究会を持つ他、2度、外国人研究者を含めたシンポジウムを開催する。こうした頻繁な研究会活動を通して、ヨーロッパ史研究者・非ヨーロッパ地域研究者による、地域・時代の枠を越えた研究報告と意見交換・討論を進め、研究目的に挙げた視点から、ヨーロッパ・アイデンティティの特質と、その世界史的意味・問題点を明らかにする。この年度には、ヨーロッパから共同研究者を招聘するだけでなく、研究会メンバーが渡欧することにより、統合の進むヨーロッパにおける人々の意識にふれつつ、その地の学界状況を把握し、また研究者レベルの相互交流の拠点を形成することにつとめる。このような渡欧研究においては、とくに若手研究者の活動を積極的に支援する。

一定の段階で成果を報告書にまとめるが、報告書には招聘した外国人研究者の成果もあわせて掲載し、さらなる討論の材料とする。また、研究成果報告書とは別に、研究成果を広く社会にたいして公開するため、年内に谷川稔教授を編者とする書物を刊行する。

活動状況

本研究会では、昨年11月に上記シンポジウムを実施し、以後、研究会メンバー全員の参加による通常の研究会と時代別のセミナーを隔月で開催している。ここでは、現在までの活動状況を開催日時に沿って順次紹介する。

<シンポジウム>

歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ
新しいヨーロッパ史像を求めて

日時： 2002年11月3日 午後1時～6時

場所： 京大会館

報告： 庄子 大亮氏（京都大学・院）

「古代ギリシアとヨーロッパ・アイデンティティ
ヨーロッパの源流としてのギリシア像再考」

小山 哲氏（京都大学）

「ヨーロッパ統合と東中欧史の構築
「妹」の居場所を求めて」

原 聖氏（女子美術大学）

「ブルターニュにとってのブリタニアとケルト
精神史としての起源史」

コメンテーター： 江川 温氏（大阪大学）、井野瀬 久美恵氏（甲南大学）

司会： 谷川 稔氏（京都大学）、服部 良久氏（京都大学）

【活動報告】

EUとその東方拡大による「新しいヨーロッパ」の形成は、近代国民国家を中心とする19、20世紀以来の歴史認識の枠組みに、根本的な再検討を迫っている。このシンポジウムは、ヨーロッパ連合というトランスナショナルな共同体（複合的大地域）がはらむ諸問題を、歴史学の立場から多角的に再解釈することをめざして企画された。アイデンティティ複合（地域・国民国家・EU）や多文化混交がもたらす相克については、すでに国際政治学や国際社会学による同時代的・空間的分析があるが、ここでは、歴史の時間軸を遡り、古代史から中・近世史におけるリージョナル・ナショナル・トランスナショナルな結合をふまえた、表象としての「ヨーロッパ意識」のあり方を検討した。同時にそれらを、近現代におけるヨーロッパ世界の確立とその起源神話の「読み替え」の問題ともつきあわせる形で議論は展開された。

当日は、全国からおおよそ150名の参加者を得て、会場は議論の熱気で包まれた。コメンテーターから、中世西欧世界や近代イギリス（連合王国）の自己意識をふまえた議論が提出されたほか、フロアからも、古代ローマ帝国にはじまって、ビザンツ帝国、オスマン・トルコ、現代ロシア、中欧・ハンガリー、近代ドイツ、アメリカ、中世イタリア、古代アフリカにいたるまで、さまざまな地域と時代からの発言が相次ぎ、盛況のうちに時間が尽きた。なお、この日に提出されたさまざまな問題をふまえて、さらに数回の研究会を持ち、同テーマの共同研究論文集の公刊をめざすことを確認して散会した。（谷川 稔）

【報告要旨】

報告1

古代ギリシアとヨーロッパ・アイデンティティ
ヨーロッパの源流としてのギリシア像再考

庄子 大亮

古代ギリシア文化は、ヨーロッパの源流として位置づけられてきた。しかし一方で、そのギリシア理解はヨーロッパ中心史観批判の争点となっている。本報告では、ヨーロッパ中心史観に批判的スタンスを取りつつも、単純にそれをあげつらうのではなく、古代ギリシアとヨーロッパ・アイデンティティの関わり、そしてそこに潜む問題について考えたい。

一般に、前5世紀はじめのペルシア戦争を契機として、蔑視すべきバルバロイ（異民族）を自己に対置した「ギリシア人」が誕生したとされてきた。しかし、そのような図式の背景には、ペルシア戦争勝利に中心的役割を果たしたアテナイが、バルバロイ像を喧伝し、自らが「ギリシア文化」を体現するとした言説があり、そのイメージが特に近代以降、ヨーロッパの源流としてのギリシア史像形成において利用されたのであった。「オリエントにも目を向ける」というヨーロッパ中心史観批判にも、こうした一枚岩的な「ギリシア文化」という実体の前提が垣間見え、実は、オリエントとギリシア（ヨーロッパ）の差異の再生産という逆説的な一面を持つのである。一方、近年、欧米の研究者のあいだでは、ギリシア文化を異質な他文化として捉えようという姿勢が見られる。しかし、根底での共通性を認めたいうでの、表層的な異質性の探求に過ぎないのではないか、また、一体性を持った「ギリシア文化」をまず想定することに根本的問題はないのか、といった疑問は残されている。こうした問題をふまえて、今なすべきは、外部との絶対的差異を認めないと同時に、内部の多様性を強調し、「古代ギリシア」そのものを再考すること、そしてそこから新たな地平を切り開いていくことではないだろうか。

西洋史という学問分野に属す者として、ヨーロッパ・アイデンティティと歴史との関わりは、絶えず意識しなければならないだろう。そしてそのとき歴史家は、どこに立ち、誰に向かって、何を語るのか。本報告はまた、そうした自己への問いでもある。

報告2

ヨーロッパ統合と東中欧史の構築 「妹」の居場所を求めて

小山 哲

ここ十数年来、ヨーロッパ東部の歴史研究を取り巻く環境は、大きな地殻変動のなかにある。地盤を動かす大きな力は複数の源に発しているが、相互に干渉し、また増幅し合いながら、歴史学の知の現場にさまざまな変化をもたらしつつある。

地殻変動の第一の震源は、1989年にポーランド、ハンガリーからはじまった東欧諸国の体制の転換である。社会主義体制の崩壊は、この地域の政治的な地図を塗り替えただけでなく、歴史認識の枠組みや歴史研究の体制にも少なからぬ変化をもたらした。地殻変動の第二の震源は、ヨーロッパ連合の成立と、現在進行中のその東方拡大である。旧「東欧」諸国の歴史研究は、体制の転換によって自国史の座標軸の建て直しを迫られる一方で、「国民史」の枠組み自体を相対化し、「ヨーロッパ史」のなかに位置づける作業を同時に進めるという難しい課題に直面している。それは、歴史研究・叙述の空間的な枠組みとして、ナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーのあいだにどのような地域の設定が可能かという、今日の歴史学が抱えるより大きな課題のひとつの応用問題でもある。

本報告でとりあげる「東中欧」史の構築は、このような課題に応えようとする試みのひとつである。「東中欧」という歴史的な地域概念を最初に提唱したのは、ポーランド出身の歴史家オスカル・ハレツキであった。ハレツキは、ヨーロッパを四つの歴史的な地域に区分し、中欧東部の非ド

イッの地域を「東中欧」と呼んだ。半世紀前に提起されたこの地域区分は、現在、東中欧研究所を中心に進められている 地域 史研究の土台となっている。1990年代初頭にルブリンに設置された東中欧研究所は、国境を越えた共同研究によってこの地域の歴史と現状の分析を進めることを目的とする非政府機関であり、この地域の歴史研究者にとって重要な交流と対話の場となりつつある。

本報告では、「東中欧」史の構築の経緯と成果を検討し、その特徴と問題点を整理することによって、ナショナルな枠組みを越えた 地域 史研究の可能性を探ると同時に、歴史研究の領域における「ヨーロッパ」認識の現状の一端に触れてみたい。

報告3

ブルターニュにとってのブリタニアとケルト 精神史としての起源史

原 聖

精神史としての起源史の図式を概略するならば、古くは創世記神話とブルトウス・トロイア伝説がある。ブリタニアでは9世紀には知識人の自覚として形成されたが、汎欧州性をもっており、西欧諸国では、15 - 16世紀まで「歴史的事実」として自覚されていた。西欧諸国がその成立時に共有した「起源」伝説である。ブルターニュ地方はブリタニアからの移住民を中心に4 - 8世紀にかけて形成される。これは歴史的事実であり、事実と伝説形成の関係はつねに考察されなければならない。ブリタニアにつながる「渡来」伝説は、「最初の渡来武将コナン」伝説、「渡来聖人」伝説、さらにはアーサー王伝説、「最初の王国形成者」ノミノエ伝説などとして、9 - 12世紀に形作られる。

ところが16世紀になって、フランスではガリア・ケルトが「起源」伝説として登場する。フランスの国家建設が自覚的になるなかで、その独自性を歴史的に保証するガリアが語られるのである。17世紀には今日いわゆるような言語的同属性に基づくケルトが「人類起源」として、ブルター

ニュなどでもことしやかに主張されはじめる。いわゆる「ケルトマニア」の登場であり、この主張は19世紀でもブルターニュでは意味をもった。

こうしたなかでのケルト性は、16世紀以来のガリア＝フランスと同一視する思想と、言語的な同属性から島嶼地域とのつながりを重視する思想に分かれることになる。19世紀になるとロマン主義から発するフォークロアの考え方が、「源泉」としてのケルトを強調する。19世紀後半以降、ブルターニュ民族主義が興隆するなかで、ケルト性は重要になる。それは「ネオ・ドルイディズム」という形で、実際にブルターニュ民族主義運動のなかで勢力を占めることになるが、その内実は以上のような多義性を含むものだった。

< 第1回研究会 >

シンポジウム

「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ

新しいヨーロッパ史像を求めて」をふりかえって

日 時： 2002年12月27日 午後1時半～5時

場 所： 御車会館

報告者： 大津留 厚氏（神戸大学）

「東」の「東」

杉本 淑彦氏（京都大学）

「ヨーロッパ・アイデンティティとナポレオン体制」

【活動報告】

第1回研究会は12月27日に20名近い参加者を得て開かれました。この研究会に先だって、昨年11月3日のシンポジウム「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」の発言記録をテープから文書に移し、さらにこれを整理要約した文書を作成し、研究会メンバーやシンポジウム・コメンテーターに配布しました。研究会ではこれらに基づき、シンポジウ

ムで明らかにされた問題点、論じられなかった点などを議論しました。くわえて神戸大学の天津留厚氏、京都大学の杉本淑彦氏から、ハプスブルク帝国とヨーロッパ・アイデンティティ、フランス近代史からみたヨーロッパ・アイデンティティについての報告をいただきました。とくに議論が白熱したのは、イスラム史、ビザンツ史、ロシア、東中欧など、ヨーロッパの中枢部以外、ないしは非ヨーロッパ地域の歴史からみたヨーロッパ・アイデンティティの問題点に関してでありました。「ヨーロッパ」を否応なく意識させられたのは第一に非ヨーロッパ世界であったことを、あらためて認識させられます。第2回研究会はイスラム史研究者、羽田正氏の報告をいただき、こうした点についての議論をすすめ、ヨーロッパ・アイデンティティの問題点を様々な視点から検討していく予定です。(服部 良久)

【報告要旨】

報告1

「東」の「東」

天津留 厚

この報告の目的は、ヨーロッパ概念を直接問うものではなく、ヨーロッパが持つ独特の「東方」概念を、もともと「ヨーロッパの東方国家 = Reich im Osten」の意であったオーストリア (Österreich) における「東欧」概念の変化を通じて考えることにある。

そこまで問題を限定しても、なお無数の東欧像がありうるだろうが、ここでは特にオーストリアの東欧研究を担ってきた「東欧・東南欧研究所」が研究対象とした地域を考察する。東欧・東南欧研究所はもともと「東欧史セミナー」の名で呼ばれていたが、1948年にバルカン学研究所図書館を吸収してその名でよばれるようになった。その東欧史セミナーは19世紀の末にオリент学講座とスラブ言語学講座が合流する形で成立し、そこではハプスブルク帝国を含まない、より東の地域が研究対象

であった。ところが1918年にハプスブルク帝国が崩壊すると「オーストリア」概念が縮小するのに合わせて「東欧」概念が拡大していくことになるが、それが研究対象の変化として現れるのは第二次世界大戦後の1948年以降である。前にも述べたように、東欧史セミナーはバルカン学研究所図書館を吸収して東欧・東南欧研究所となり、旧ハプスブルク帝国地域を含む、狭い意味でのオーストリアよりも東の地域が対象となる。

さらに1989年に東欧諸国の共産党政権が崩壊し、学术交流が盛んになると、東欧・東南欧研究所はブルノ、プラティスラヴァ、ブダペスト、リュブリアナおよびソフィアに支部を作り、「ハプスブルク帝国」+ブルガリアの学术交流の拠点となるにいたった。その場合研究対象は「狭いオーストリアも含むハプスブルク帝国+ハプスブルク帝国よりも東の地域」となり、オーストリアの東欧概念はオーストリアをも含むものになった。

もちろんこの研究所の対象地域の変遷だけでオーストリアの東欧概念一般の変化を語ることはできないし、ウィーン大学だけをとってもオーストリア史研究所との一定の棲み分けがあることも事実である。しかしヨーロッパの「東」における「東」概念の変化は、そこから「西」にある「ヨーロッパ」像を考える一つの視点を提供しているといえるだろう。

報告2

ヨーロッパ・アイデンティティとナポレオン体制

杉本 淑彦

ナポレオンのヨーロッパ支配はヨーロッパ統合に与したのか。このような問いかけが、フランスでは今日でもよくおこなわれています。現在進行中のヨーロッパ統合を是としたうえで、その統合の起源をナポレオンに見るといえるのは、ナポレオン好きの人間がいかにも思いつきそうな発想だといえるでしょう。もちろんアカデミズムの世界では、ナポレオ

ン体制は政治面においても経済面においてもヨーロッパ統合に与したとはいえない、という解釈が多数派です。

客観的な研究に基づけばヨーロッパ統合に与したとはいいがたいナポレオン体制を、統合の起源の一つだと思ひこんでしまう。人びとのこのような心性のありようが、じつはヨーロッパ・アイデンティティのあらわれの一つではないだろうか、という気がします。ナポレオン体制の実際の事績と、その事績に関する記憶とのあいだの差異を解明することは、ヨーロッパ・アイデンティティの形成を考えるうえで、たいへん重要なことだと思います。

ヨーロッパ・アイデンティティ研究においてナポレオン体制を取りあげることが重要だと思われる理由は、もう一つあります。「文明化」という問題です。ナポレオンは、エジプトやスペイン、東欧などの征服地を支配する際に「文明化」を看板に掲げますが、「文明化」政策の中身は地域ごとに違っていったようです。この違いは、ヨーロッパと非ヨーロッパとの心性上の境界線が当時どこで引かれていたかを、わたしたちに示唆してくれるでしょう。もちろん、境界線の内と外における「文明化」の事績を後の人びとがどのように記憶してきたのか、ということも、ヨーロッパ・アイデンティティのありようを探るうえで重要な問題だと思います。

< 第2回研究会 >

日 時： 2003年3月2日 午後1時半～5時

場 所： 芝蘭会館・2階研修室

報告者： 羽田 正氏（東京大学東洋文化研究所）

「イスラーム世界」とヨーロッパ？」

【活動報告】

3月2日(日)、芝蘭会館で開催された第2回研究会では、東京大学東洋文化研究所の羽田正氏より「イスラーム世界」とヨーロッパ？」と題

してご報告をいただきました。羽田氏は、日本の歴史叙述や世界史教育の場で一般に用いられている「イスラーム世界」概念の問題点を明解に整理し、あわせて「ヨーロッパ」概念についても批判的な視点から見直す必要があることを指摘されました。この刺激的な報告に続いて、参加者のあいだで、「キリスト教世界」自体の多様性、ヨーロッパ内部のイスラム教徒の位置づけ、遊牧民の世界としての「中央ユーラシアステップ世界」概念の妥当性などの問題をめぐって活発な議論が展開されました。「イスラーム世界」とヨーロッパ」という問題設定自体がヨーロッパ的世界観の表象にすぎないのではないか」という羽田氏の問いかけは、「ヨーロッパ」の存在を自明視しがちな西洋史研究者に対する警鐘であると同時に、ヨーロッパからの視点に強く規定された私たちの世界史認識の枠組み自体を根本的に考え直すべきではないかという問題提起でもあります。「ヨーロッパ」がたんなる表象にとどまらず、空間的・制度的に明確な輪郭を持つ政治的実体として編成されつつある現在、私たちの研究会では、この制度を内から支えるアイデンティティの形成過程を歴史的な視点から問い直す作業をさらに進めていきたいと考えています。(小山 哲)

【報告要旨】

「イスラーム世界」とヨーロッパ？

羽田 正

「イスラーム世界」という言葉は、前近代地域世界の一つを意味する語として世界史叙述においてしばしば使用される。しかし、この語は学問的に意味のある定義がしにくい上、地理的空間としては確定できず、歴史研究の用語としてはあまり適当とは言えない。

従来、この語が無前提に使用されてきた理由は、それが近代歴史学を生み出したヨーロッパの人々の世界観（「ヨーロッパ」と非ヨーロッパ世界の代表としての「イスラーム世界」）を反映していると同時に、「イスラームの家」と「戦争の家」とを区別するムスリムの世界観にも合致

していたからである。無批判、無限定に「イスラーム世界」という語を使用するという態度は、ときに我が国の現代世界研究者やマスコミの論調にも見られる。一方、「ヨーロッパ」をどのように定義できるかについては、研究者の間に多くの議論がある。今日の研究者の多くは、従来の「ヨーロッパ史」研究が内包していたいくつかの問題点（ヨーロッパ中心主義、国民国家史など）をよく理解しており、それを乗り越えようと努力している。

しかし、それにしても、「ヨーロッパ史」が存在するという点についての疑いはまったく持っていないようである。ひるがえって考えてみれば、歴史研究における「イスラーム世界」も「ヨーロッパ」も、元来、自分たちはヨーロッパ人であると考え人々が持つ世界観に基づいた言葉である。ヨーロッパ人ではない私たち日本人研究者が、そのことを十分認識した上で、これらを相対化するような新しい地域世界、ないしは、歴史叙述の単位を見つけだすことはできないものだろうか。私はそれは決して不可能ではないと考えている。そのためには、西洋史研究者と「イスラーム世界」史研究者の共同作業がこれまで以上に必要である。

< 第1回セミナー >

日 時： 2003年4月22日 午後5時～7時半

場 所： 芝蘭会館・2階研修室

講演者： ジョン・ノース博士 (John A. North, MA, DPhil(Oxon))
(ロンドン大学ユニヴァシティ・コレッジ歴史学科教授)

講演題目： 「キケロとローマの神々」

【活動報告】

ホームページでの予告通りに、4月22日火曜日午後5時より7時半まで、京大近くの芝蘭会館において、ロンドン大学ユニヴァシティ・コレッジ歴史学科教授のジョン・ノース博士(John A. North, MA, DPhil(Oxon))のセミナーが開催されました。教授は、古代ローマ史、とくに共和政史

と宗教史の専門家で、*Roman Religion, Oxford, 2000* 等の業績がある方です。当日は、まず同教授の「キケロとローマの神々」と題する講演を拝聴し、その後20名余りの出席者全員が簡単な自己紹介を英語でおこなった上で、講演の内容を中心とする討論をおこないました。ローマ人の宗教や心性に関わる出席者からの熱心な質問にノース教授が丁寧に回答され、2時間半ほどの短時間ではありましたが、意義深いセミナーとなりました。古代ローマ人のアイデンティティを考える上で多くの示唆を得られたと、主催者は喜んでおります。また、ローマ史以外の分野を専門とする研究者・院生の出席も得て、「宗教」を多面的に考える機会ともなりました。(南川 高志)

【講演要旨】

キケロとローマの神々

ノース教授は、講演「キケロとローマの神々」のなかで、共和政後期の政治家キケロのローマ多神教にたいする態度を分析した。キケロの宗教的態度は、これまでも度々論じられてきたトピックであるが、19世紀以来の発展論的な宗教史においては、キケロは古拙なローマ多神教にたいして、懐疑的な態度を示していたとする見解が一般的であった。ノース教授はこのような見方に反対して、キケロの著作を大きく三種に分類し、そこにみられる彼の宗教的態度を分析することで、自らの考察を進めていった。

キケロの著作は、弁論、書簡、哲学的対話編に分類される。まず、弁論においてキケロは、ローマ宗教にたいし頻繁に言及をおこない、ローマ発展の基礎をその神々に求めている。従って、弁論においては、宗教にたいするキケロの懐疑的態度を強調する従来の見解は、否定されることになる。書簡と哲学的対話編においては、より問題が複雑になる。書簡では、修辭的な用法を除き、弁論にみられた神々への頻繁な言及は存在しない。同時にキケロは、個人として政治的な苦境にあったときにも、安易に神々へ救いを求めることはない。そして、このようなキケロの態度は、書簡相手の返信にみられる宗教的態度と一致しているのである。

つまり、キケロは書簡という執筆形態に拘束された形で、文通相手である同時代のエリート層と同じ宗教的態度を示すのである。次に哲学的対話編であるが、ここでは『占いについて』が考察に値する。この著作においては、従来、宗教的な予言の非合理性を批判する登場人物マルクスとキケロ自身が同一視され、キケロの懐疑的な宗教態度が主張されてきた。しかし、物語作成者として時折みられるキケロの発言に注目するならば、宗教にたいする最終判断を読者に委ねようとするキケロの態度の方をむしろ重視すべきである。つまり、『占いについて』におけるキケロは、一方的な宗教批判者ではなく、哲学的対話編という形式に影響された上で、読者に開かれた宗教的態度を保持する第三者的な人物なのである。

以上が、ノース教授の講演の概要であるが、彼の主張の眼目は、キケロの著作をその内容との関係において考察し、著作内容にあわせた複数の宗教的態度を明らかにしたことである。そして、そこには、従来の一義的な見方では捉えることのできない、多様な「キケロ」が存在することになるのである。

(京都大学大学院博士後期課程 藤井 崇・要約)

< 第3回研究会 >

日 時： 2003年4月27日 午後1時～5時

場 所： 京大会館・102会議室

報告者： 羽場 久滯子氏（法政大学）

「EUの拡大と中欧のアイデンティティ：European Identity と National Interest のはざままで 冷戦の終焉から対イラク戦争まで 」

松本 悠子氏（中央大学）

「アメリカ意識の構築とヨーロッパ 新世界、西洋文明、白人 」

【活動報告】

今回は、中・東欧現代史の羽場久滉子氏と、アメリカ史の松本悠子氏にご報告いただいた。今日、EUが急速に東方拡大をとげていくなかで、あらためて「ヨーロッパとは何か」「そもそもどこまでがヨーロッパか」という、文化的・地理的アイデンティティが問い直されている。羽場氏はまず、かつて冷戦体制下で「東欧」と一括された東の諸国が、みずからを「中欧」と捉え返してヨーロッパへの文化的帰属意識を再確認しつつ「西方回帰」した、その歴史的記憶の在りかを指摘する。そのうえで、これらの地域が現実の国際政治のなかでは、NATOという、アメリカを含めたもうひとつの受け皿とのあいだで「国益」を図らざるをえないアンビヴァレントな状況を、さまざまな角度から鋭く検証された。コソヴォ空爆からイラク戦争にいたる国際政治への展望は、「歴史としての」ヨーロッパ・アイデンティティに遡及するうえで、欠かせない前提的認識であることをあらためて確認した。

松本報告では、ヨーロッパ移民に起源を持つアメリカ合衆国が、「古きヨーロッパ」を乗り越えるものとして自己を対置する一方で、「ヨーロッパ文明の継承者」像を形作りつつ、自己意識（アメリカン・アイデンティティ）を形成してきたプロセスが提示された。建国期に遡る克明な言説分析にもとづく論点は多岐にわたり、ヨーロッパ史家にとってはまことに刺激的であった。余談だが、アメリカが「ヨーロッパ文明」をモデル化する一方で、そのヨーロッパ移民を「序列化」していったことの指摘などは、今日的にも興味深い。EUとNATOに抛りながら苦悶する「中東欧」（劣位に置かれた移民の母国）が、アメリカによって「新しいヨーロッパ」として歓迎されている事態は、「歴史の皮肉」を感じさせずにはおかない。いずれにせよ、この両義的なアメリカ像の推移が、ヨーロッパ・アイデンティティに浅からぬ影響を及ぼしていることは疑いなく、松本氏も指摘するように、アメリカ史家とヨーロッパ史家のさらなる対話が望まれよう。

討論では、さらに論点がひろがり、ローマ・カトリック文明圏とビザンツ・正教文明圏、ロシア・ウクライナのヨーロッパ性、イングランド（アングロ・サクソン）のヨーロッパ認識など、主として広域文明圏における宗教・人種・言語と政治のねじれた関係が検討された。

なお、昨秋のシンポジウム以降、今回までつみ重ねてきた討論をふまえ、6月末をめどに論文集執筆に取りかかることを確認した。(谷川 稔)

【報告要旨】

報告1

EUの拡大と中欧のアイデンティティ：European Identity と National Interest のはざままで 冷戦の終焉から対イラク戦争まで

羽場 久渥子

なぜ今、EUの拡大と中欧のアイデンティティなのか。

2002年12月に中・東欧と地中海10カ国のEU加盟が決定し04年5月には最終的に加盟が実現され25カ国欧州となる予定である。今回ルーマニア、ブルガリアが含まれずトルコは交渉にも入れなかったため、拡大は当面Christianityの金持ち先進国クラブの形成ではないかという批判も聞かれた。他方NATOも02年11月の拡大決定により、04年半ばまでには19+7カ国の拡大NATOが実現される。ここにはヨーロッパ・クラブの排他性はなく、西欧・北米、トルコ、中・東欧に加え、近い将来バルカンや東スラヴにまで広がる勢いである。

冷戦終焉後、二つに分断された欧州の壁が取り払われ、「ひとつのヨーロッパ」「ヨーロッパ回帰」が西と東の合言葉となった。時おりしもマーストリヒト条約が91年12月に合意、93年11月に発効され、欧州のさらなる統合の深化と拡大を促す欧州連合(EU)が創設された。

「中欧」という概念は、そもそも戦間期のドイツ支配の記憶としてではなく、第一次世界大戦前のハプスブルク帝国の文化圏の下で独自の多様で統合的な文化が開いた記憶に拠っている(帝国支配すべてが肯定的に捉えられているという訳では必ずしもない)。

冷戦末期、東西分断が続く80年代に、反体制知識人のクンデラ、コンラードが「ヤルタを越える中欧概念」という用語を使い反体制文化人の間に広がった。89年に社会主義から資本主義への広範な体制転換が起こり、90年代初頭に各国で反体制派の知識人が政権を担うと、以後「中欧」の

概念は一挙に拡大した。中欧概念は、それ自体東や南に対する優越意識を内包する。Center of Europe, Heart of Europe という言い回しにも象徴されるように、東との闘争・神聖ローマ帝国の継承としてヨーロッパの中心的正統性を自負するものでもある。加えて「西と東のはざま」「西の精神世界と東の貧困の共存」(エステルハージ)というambivalenceも持っている。

他方で、冷戦の終焉後、「ヨーロッパは一つ」という考え方は、「ヨーロッパとは何か」「ヨーロッパとはどこまでか」というIdentityの問い直しとつながる。これに関し、ポミアンやデイヴィスらにより、旧来「空白」に残されてきた「東部ヨーロッパ」を取り込みヨーロッパの定義を再確認する書が次々と出され、ベストセラーとなった(欧州は統合と分裂の歴史であり、境界線の歴史である、欧州とは異質の混合性であり、スラヴ・アジアと交わりながら成長したなど)。

本報告では、冷戦の終焉・社会主義体制の崩壊から2003年の対イラク戦争まで、「東」から「中欧」ないし「中・東欧」へと変わった地域が、なぜ・いかにしてEU/NATOへの加盟を目指し、「ヨーロッパ」と「中欧」をどのように自己認識し、EU/NATOへの加盟達成の過程でいかなる問題を抱え、またコソヴォ・アフガン空爆・イラク戦争の中でどのように対処していったかを、European IdentityとNational Interestのはざままで揺れる中欧地域の現状と問題点を探る中で検証した。

報告2

アメリカ意識の構築とヨーロッパ 新世界、西洋文明、白人

松本 悠子

アメリカ合衆国とヨーロッパとの関係は複雑で、相矛盾する多様な側面を持っている。本報告では、その多様な側面の一つとして、アメリカがアメリカであることを確認するために、アメリカ独自のヨーロッパ像をつくってきた歴史を紹介した。

建国当初からアメリカは、「腐敗堕落した旧世界 = ヨーロッパ」像をつくり、それとは異なる「新世界」であることを主張してきた。それを如実に示したのは19世紀末のジャクソン・ターナーのフロンティア演説であろう。ターナーによれば、フロンティアでヨーロッパ人は自由と民主主義を実現するアメリカ人に生まれ変わるのである。

しかし、同時に、ターナーはフロンティアの消滅によりアメリカもヨーロッパと同じ道をたどるのではないかという危機感を抱いた。ターナーだけでなく19世紀末から20世紀前半に多くの人々に共有されていた国家や国民意識に関する危機感は、この時期のヨーロッパ像にも変化をもたらした。第1に、単にヨーロッパを否定するのではなく、アメリカが理解するところの「ヨーロッパ文明」にアメリカのルーツを求め、「ヨーロッパ文明」或いは「西洋文明」の発展したもとして「アメリカ文明」を位置づける動きが顕著になった。第2に、理念としてのヨーロッパを受け継ぎながら、現実のヨーロッパの人々に対しては序列化を行った。この時期、ヨーロッパからの移民は多くの摩擦を経験したが、それでも白人とみなされ、ヨーロッパは白人社会として位置づけられた。しかしながら、同時に「アングロ - サクソン人種」を頂点とした序列がヨーロッパ系の諸民族の間につくられ、1924年の移民法に反映されたのである。第3に、商品だけでなくフォーディズム、広告、映画などのアメリカ的生産、流通様式がヨーロッパへ輸出され、それは目に見える形でヨーロッパとは異なるアメリカ的なものをアメリカに意識させた。と同時に、ヨーロッパにおいて「物質主義的なアメリカ」という批判が高まり、アメリカの自画像に大きく影響した。

第二次大戦後、アメリカの優越性を示唆する楽観的なアメリカ例外主義が優勢になったものの、冷戦構造のなかで「西欧」に起源を持つ「西洋文明」の継承者という意識は続いていた。ところが、近年、西洋中心主義を批判する多文化主義者とアメリカが西洋文明の継承者であると主張する人々との間でアメリカのあり方に関する論争が行われている。国際関係においても、冷戦終結後、一極支配を目ざすなかで、アメリカにおけるヨーロッパ像はさらなる変化をみせているように思われる。

このように、アメリカは外なるものとしてのヨーロッパを意識しながら自らのアイデンティティを形成してきた。では、ヨーロッパは、外なるものとしてのアメリカを意識して、自らの求心力を高めたのであろう

か。アメリカが外からつくり上げたヨーロッパ像は、ヨーロッパ・アイデンティティの形成に影響を与えたのであろうか。ヨーロッパ史研究とアメリカ史研究との対話が今後さらに必要になるように思われる。

エッセー

本研究会で発行しているニューズレターに寄せられたエッセーを2編掲載する。

(1)

新しい時代を迎えるプラハから

藤井 真生 (京都大学大学院博士後期課程)

2003年2月2日、チェコ共和国の大統領ヴァーツラフ・ハヴェルが引退した。チェコ現代史において彼が果たした役割については詳しく述べるまでもないだろう。1989年のビロード革命から丸13年間、彼の引退をもってチェコは社会主義崩壊後の時代に一つの区切りをつけたとみることができる。私が初めてチェコを訪れたのは2000年の夏であり、社会主義時代を知らないのももちろんのこと、その崩壊後の急速な変化も経験していない。しかし、体制自体は安定した軌道に乗ったと思われるここ数年、むしろ生活レベルでの変化が非常に大きいということは、チェコに長く住んでいる人の共通見解であるようだ。以下、私が直接経験し得たこの二年半の間の変化について、そういった日常生活の範囲から幾つか触れてみたい。

歴史という人文系の学問を専攻する立場上、チェコにおいても頻繁に訪ねざるを得ないのが本屋と古本屋である。プラハの古本屋に関しては、故千野栄一氏が著書の中で触れているように、最近は倉庫の維持費や質の良い古本の供給源などが問題となっている。中心部から撤退したり、観光客相手の古地図や絵ガキの比重を増しているところもあつたりと、商業的にはなかなか苦戦しているようである。むしろ、ブルノなど

の地方都市で意外な発見をすることが多い。それに対して、古本屋とは対照的に、市の中心部への大型書店の出店が続いている。

私がプラハに来た当初、人文系の専門書でいえばカレル大学哲学部近くの「Fišerフィシエル」、それ以外も含めた全般を扱っている大型書店では、ヴァーツラフ広場に面した「Dům knihy本の家」と「Academiaアカデミア」の二つがあった。この三ヶ所を廻れば、新刊に関してはたいてい事足りた。出版冊数が極めて少ない90年代前半の本に関しては、丹念に市内の本屋を探し回るか、それとも古本屋に出るのを気長に待つ、というのが一般的である。ただし、古本屋にも出てくることはほとんどないので、結局のところ図書館で借りてコピーするしかない。ところで、ヴァーツラフ広場には上記二店以外にも本屋はあるのだが、昨年、「本の家」が改装して売り場面積を広げたかと思うと、さらに別の大型書店ができた。広場からちょっと入ったところでも新しい店を見かけ、客の奪い合いにならないものかと余計な心配もしたが、チェコの出版産業は非常に好調なようである。

売り場では、チェコ文学と並んで、歴史書のコーナーがとて広く設置されている。各種新刊と共に世界各国史シリーズも続々と出版され、90年代末から刊行が始まったチェコの通史は出版社ごとに三種類もある。この活況は、一つには政治・経済面での安定が理由としてあげられ、またもう一つには、それを背景として、体制変換後の視点で「自国史」、その他の歴史を書く必要があった、とも言うことができるだろう。ただし、チェコはスロヴァキアと違って、一から「自国史」を創造する必要に迫られているわけではないので、素直に出版界の好況に帰すべきかもしれない。少なくとも私の専門である中世部分を読むかぎり、内容から何らかの思想や気負いといったものを感じることはなく、むしろそういったイデオロギー的なものから解放された、冷静な距離感というものを感じ取れる。

当然のことながら、チェコ史学も時代の影響を受けて発展してきた。その揺籃期にあたる19世紀後半にはドイツとの対決色が強く、もちろん戦後はマルクス主義的な史観が支配的であった。しかし、近年顕著なのは、そういった強烈なイデオロギーからはちょっと距離を置いた客観性である。といっても、戦間期のように主観を排除して史料に現れる「事実」のみを記述しようとしているわけではない。その特色を強いてあげ

るとすれば、「ヨーロッパ復帰」と表現できるかもしれない。中世史に関していえば、チェコの歴史に対して圧倒的な影響力を及ぼしてきた神聖ローマ帝国および隣国のポーランド、ハンガリーだけでなく、その向こう側の英仏や教皇庁に対する視線、それらの勢力が総体として織り成す「ヨーロッパ史」の中に「チェコ史」を位置づけようとする意識、これらが明確に打ち出されているように思われる。さきほど、通史刊行の背景として思想的な色合いが薄いかのように述べたが、EU統合を前に控えて、「チェコ民族」のアイデンティティを今一度探求する、という意識をチェコの歴史家たちが共通して抱えていることは、もちろん否定できない。

さて、「ヨーロッパ復帰」意識と関連して、と言えるかどうか、チェコの歴史家の著作のみならず、ここ二、三年は翻訳出版も盛んである。試しに机の上にある新刊を一冊手に取り、既刊書および刊行予定書を見てみると、主な著者はジャン＝クロード・シュミット、カルロ・ギンズブルク、フィリップ・アリエス、エーディット・エンネン、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ、ジョルジョ・デュビー、マルク・ブロックと続く。日本でももはや古典となった感のある彼らの研究が、個々の研究者レベルではともかく、一般レベルではようやくこれから摂取されようとしているのである。

一般チェコ人のEU加盟に対する期待は非常に高く、それは「もともとヨーロッパ世界の正当な一員であったにもかかわらず、不当にも東側に取り残された」という意識の裏返しでもあろう。できるだけ早く「ヨーロッパ」に復帰してその一員として行動する。この基本方針は、ハヴェルの後を誰が継いでも（いまだに決まっていないが）基本的に変わらないと思われる。上記のように、主として「西側」の戦後歴史学の成果が大量に刊行されることも、そういった「ヨーロッパ復帰」を希求する意識の一つの表れかもしれない。ただし、何が「ヨーロッパ」なのか、そういった根本的問題に立ち返ってみる冷静さを得られるのは、もうちょっと先のことであろう。

ところで、チェコ中世史ではチェコが属する地域を「中欧střední Evropa」と表現する。これは、私が見たところ、凡そチェコ、ハンガリー、ポーランド、オーストリアおよびドイツを指していて、フランス、イングランド、イタリアといった、いわゆる西欧と、東の正教世界に対

する「中央」を意味すると思われる。ドイツ人の居住地域および彼らによる東方植民運動の影響を大きく被った地域、と定義することもできるが、おそらくチェコ人はそうした括りを嫌がるだろう。これは、チェコを中心として見た場合の、非常にプリミティブな地理的概念なのである。プラハ城の少し後方にあるストラホフ修道院は、チェコの蔵書数を誇る修道院図書館で名高いが、ここには、イベリア半島が頭部、イタリア半島が右腕、ロシアからドナウ下流、ギリシャにかけてがスカートといった具合に、ヨーロッパを女性として擬人化した16世紀末の地図が展示してある。チェコ（ボヘミア）は？もちろん彼女の心臓である。

(2)

「ヨーロッパ」がつくられる

中村 敦子（京都大学非常勤講師）

イギリス人がEuropeと言うとき、イギリスを含めずにヨーロッパ大陸の地域を意味していることは少なくない。英和辞典で‘Europe’という単語を引くと、ヨーロッパ、欧州という訳と一緒に英国と区別しての欧州大陸、という意味が載っている。しかしそのイギリスは、通貨としてユーロではなくポンドをまだ維持しているものの、ヨーロッパ連合、すなわちEUの主要国のひとつである。とすると、「ヨーロッパ」という言葉は、イギリスを含んだり、含まなかったりしていることになる。

ここではイギリスの例をあげてみた。本プロジェクト「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」を含め、「ヨーロッパ」の概念をめぐる問題が近年さかんに議論されている。これがEUの発展という今現在の動向を反映していることは改めて指摘するまでもない。

さて、今年4月に邦訳の出版されたR・パートレット『ヨーロッパの形成 950年 - 1350年における征服、植民、文化変容』伊藤誓、磯山甚一訳、法政大学出版局、2003年(原著Robert Bartlett, *The Making of Europe, Conquest, Colonization and Cultural Change 950-1350*, London, 1993, pbk. 1994.) は、この問題に対する中世ヨーロッパ史の

分野におけるひとつの試みである。

副題に「征服、植民、そして文化変容」とあることに注目しよう。パートレットが「ヨーロッパの形成」というタイトルのもとに描写したのは、いわゆる中世盛期という時代、「ヨーロッパの辺境地域」が征服、植民、それにともなう文化変容によって、「ヨーロッパ文明」にとりこまれていく過程であった。外的拡大をとげつつ、この時期に文化的統一体としてのヨーロッパが形成されていくのである。では、「ヨーロッパの辺境地域」はどこを指しているのか、何が「中心文明」と考えられているのだろうか。

取りあげられている中心的事例は、ケルト世界へのイングランドの進出、ゲルマン人の東方植民、スペインの再征服運動、そして地中海沿岸での十字軍運動である。そして、この書物において「ヨーロッパ」概念の前提は、第11章「ヨーロッパのヨーロッパ化」で述べられているように、「中心が旧フランク帝国内にあり、ラテンに属してキリスト教的であるが、ローマ・カトリック教世界と同義というわけではなく、ある種の社会的・文化的特徴が目立っており、中世盛期に間にそれ自体が変容を続けながら周辺地域に拡張しつつあった」文化であり社会であった(412頁。以下、引用は邦訳による)。パートレットによれば、この「ヨーロッパ」が拡大していくことによって、「中世の後期以降、西と中央のヨーロッパのさまざまな地域には、これらの地域をひとつの統一体(as a whole)として見なすことが妥当な十分の共通の根拠があった。」(1頁)のである。

ところで、しばしば指摘されているように、精密な世界地図を描くことができるようになる前、中世ヨーロッパ人は、アジア、アフリカ、ヨーロッパという大きな三つの大陸の区分をもちつつも、ヨーロッパという地域的枠組みよりは「キリスト教世界」という抽象的な理念を意識していた。そしてもちろん、「キリスト教世界」というならば、それは理念上、人類すべての上に広がっていくというベクトルをもつことで、地理的概念としてのヨーロッパを超越していくものではなかったか。

本書で描かれているのは、軍事行為であり、植民であり、法や言語、そしてローマ・カトリック教の拡大の具体的側面である。中世の人々が「ヨーロッパ」という語に地理的な意味以上の何を感じていたか、どのような意味付けをもっていたか、という点は問題にされていないし、前

述のような中世人の世界観のあり方を考えれば、このような問いはなじまないとはいえる。一方、本書は、「ヨーロッパはひとつの地域であると同時に、ひとつの概念である。」(1頁)という印象深い一行で始まっている。すると、「ひとつの概念」とされるヨーロッパ、その「概念」をもつ主体は、現代の歴史家による、ということになるのだろうか。

原著が最初に出版されたのは、1993年であった。今からちょうど10年前にあたる。1991年に合意されたマーストリヒト条約が発効し、EUがスタートした年である。もちろん、これは偶然で1989年にバートレットがA・マッケイと共編した書物*Medieval Frontier Societies*¹⁾からの研究上の連続と考えることもできるだろう。筆者の見限り、本書の書評は大体において、詳細な事実を積み重ねることによってヨーロッパの辺境地域の変容を明らかにしていくバートレットの試みを高く評価しているようであった²⁾。90年代初期のヨーロッパ統合の問題と直接関連付けているものは見当たらない。そのなかで、本書を、「中世ヨーロッパの」という限定つきではあるが、ヨーロッパ拡大のダイナミズムの賞揚であると指摘する*Speculum*誌の書評が注意をひく。さらに同評者は、拡大し、輸出されていったそもそものヨーロッパの文化的枢軸とは何か、を著者がほとんど述べていないことを問題にした。また、*English Historical Review*誌の書評は、バートレットのテーマ「ヨーロッパの変容」をさりげなく「より正確に言えば、ローマ・カトリック教世界の」と言い換えて書評を始めるのである。たしかに、バートレットが「ローマ・カトリック教世界と同義ではない」としたにもかかわらず、そのヨーロッパ概念は、ローマ・カトリック教世界とほぼ重なり、それは説明分析されることなく前提とされている。筆者に思い起こされたのは、本プロジェクトの第二回研究会「イスラーム世界」とヨーロッパ?」において、現代の歴史家たちが自明視しがちな「ヨーロッパ」が論点となっていたことであった。

ニューズレター第2号に掲載された、藤井真生氏の「新しい時代を迎えるプラハから」では、近年のチェコ中世史における「ヨーロッパ復帰」意識が言及されていた。本書の日本語版が出版される少し前、2002年12月にはチェコを含め、いわゆる東欧10ヶ国加盟が決定している。2004年には25カ国を含む拡大EUが発進することになったのである。何ををもってこの「ヨーロッパ」の名をもつ巨大な統合を成立させる土台とするの

か、さらなる議論の展開が予想される。

パートレットが、「ひとつの地域であると同時にひとつの概念である」と述べた「ヨーロッパ」、その「ひとつの概念」は、これからどのように変わっていくのだろうか。分断と統合、多様性と変化をもつ歴史的概念としての「ヨーロッパ」と、現代の世界において、これまでにない共同体システムを模索しつつ作りあげていこうとするEU体制の試みは、2004年、新たな「ヨーロッパの形成」をもたらすことになるのだろうか。

注

- 1) R. Bartlett, A. MacKay, eds.(Oxford, 1989).
- 2) R. R. Davies, *English Historical Review*, 109 (1994), pp. 656-8; H. E. J. Cowdrey, *The International History Review*, 16 (1994), pp. 120-2; W. D. Phillips, Jr., *American Historical Review*, 100 (1995), pp. 143-4; H. Kaminsky, *Speculum*, 71 (1996), pp. 388-90.

研究ノート

啓蒙主義的ビザンツ観の行方 近代ビザンツ研究の歩みについてのメモワール

橋川 裕之 (京都大学大学院博士後期課程)

去る2月19日から21日の3日間、一橋大学と東海大学の付属図書館を訪れる機会を得た。目的は、「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」研究会における私の研究テーマ、末期ビザンツ帝国における異文化接触とアイデンティティの問題に関連する雑誌論文を徹底的に調べ上げることだった。現在、この国内調査行で集めた二次文献を一次史料とつぎ合わせ仔細に検討する作業を行っている最中なので、その最終的な報告は別稿に譲ることとし、ここでは、欧米におけるビザンツ研究の歴史を概観し、ヨーロッパ・アイデンティティの歴史的 성격や構造を考える際に参考になると思われる点を指摘してみたい。

先の『西洋史学』の後記¹⁾で、京都大学教授の服部良久氏は、近年、文学部図書室で研究雑誌を閲覧する西洋史学専修の院生・学生の姿を見かけなくなったと書かれていたが、ビザンツ史を専攻している私の場合、閲覧すべき研究雑誌の多くはビザンツ史研究者が教官として在籍する大学に集中しており、そもそも閲覧したくても手近ではできない状況にある。

文献へのアクセスが研究環境として極めて重要であることを改めて痛感したのは、一昨年从去年にかけてイギリス、バーミンガム大学のビザンツ研究所²⁾に留学したときであった。歴史学ではJ・F・ハルドンとR・J・マクリデス、考古学ではA・ダン、美術史ではL・ブルーベーカーなど、いわゆる世界的な権威として知られる研究者を数多く集めていることもさることながら、私が率直に驚きを禁じえなかったのは、関連する研究文献が付属図書館において容易に参照できるという点だった。もちろんすべてを網羅しているわけではなく、場合によっては、高額なクーポンを購入して他大学より取寄せたり、直接出向いたりする必要はあったが、基本的には、参照すべき文献があれば、ただ単に居住する寮から歩いて数分の附属図書館へ足を運びさえすればよいのである。調べ物をする私のそばで平気でおしゃべりをする輩がいたり、貴重な雑誌や図書に無数の書き込みがなされていたり（ひどいときにはボールペンで！）、問題がないわけではなかったが、それでもバーミンガムの研究環境は予てからの私の期待に十分こたえるものであった。

ビザンツ研究の後発地であるわが国において、ビザンツ史に限定すれば、バーミンガム大学と同程度に雑誌、図書を揃えているのが、上述の一橋大学と東海大学である。それぞれ、わが国におけるビザンツ史研究の第一世代とでもいべき渡邊金一氏と尚樹啓太郎氏が長く教鞭をとっておられたところである。雑誌に関してみれば、両大学の所蔵分をあわせると、欧米諸国（もちろん、ギリシアやイタリア、ロシアや他の東欧諸国を含めて）から刊行されているビザンツ研究雑誌のほとんどをカバーするのではないかという膨大なものである。

通常、国内の大学図書館において文献を参照するにあたって、他大学生には、書庫に入室させてもらえないなどさまざまな制約がかかり、両大学図書館もその例に漏れなかったが、せつかく貴重な機会を得たので、規則で制限された範囲内、そして時間の許す限り、膨大な研究雑誌群に目を通し、メモをとり、必要なものについては複写を取っていった。運

良く総目録がある場合はよいが、なければ、雑誌の創刊号から最新号まですべて手にとりチェックする作業が要求される。主要雑誌の中でも古いものは、だいたい19世紀末から20世紀初頭にかけて創刊されているので、毎年刊行されていれば、その一つのタイトルだけで100冊前後になるわけである。

バーミンガムにあったものとは比較にならないほど美しい誌面に目を通していく過程では、ビザンツ研究それ自体が歴史的な営みであることを否応なく想起させられた。20世紀前半に活躍し、ビザンツ研究を支えていた有名無名の学者たちは、おそらくもうこの世にいないであろう。また、ドイツのH・G・ベックやH・フンガー、フランスのJ・ダルーゼやP・ゴートイエ、イギリスのR・ブラウニングやD・オボレンスキー、ギリシアのN・イコノミディス、アメリカのA・カジュダン、J・メイエンドルフなど、戦後ビザンツ学の中心的担い手であった研究者たちも、この10年くらいに間に相次いで世を去り、弟子や同僚の手による追悼文がその主たる活躍の場であった雑誌の巻頭に掲載されている。ビザンツの歴史のみならず、十字軍やマニ教などを主題に数多くの著作を世に出してきたイギリスのS・ランシマンも3年前に亡くなっている³⁾。

名実ともにビザンツ学が新たな時代を迎えつつあるという学界の認識を反映してか、*Byzantinische Forschungen*最新号⁴⁾はアメリカにおけるビザンツ史家の伝記集とでもいうべき特集を組んでいた。作業の途中であったため、A・M・タルボットによるA・カジュダンの評伝しか読まなかったが、ソヴィエト史学界におけるユダヤ人差別の問題(カジュダンはユダヤ系ロシア人であった) 1970年代末に敢行されたアメリカ亡命の経緯、アメリカ、ダンバートン・オークス研究所における研究生活の様子など、彼の論文や著作のみからは窺い知ることのできないような記述に富み、非常に興味深かった。アメリカのビザンツ学界では、カジュダンのほかに、古くから、F・ドゥヴォルニクやS・ヴリオニスといったロシア系、ギリシア系の研究者が多く活躍しており、彼らがアメリカ・ビザンツ学界の国際的な地位向上に寄与してきたことは注目に値するだろう。

いまや欧米はもちろんのこと、極東の日本や中国においても専門研究者が少なからず存在するビザンツ研究の歴史自体は極めて古く、オスト

ロゴルスキーによれば、アウグスブルク、フッガー家の秘書であったヒエロニムス・ヴォルフによる古典研究が起源であるという⁵⁾。その後、ビザンツ研究は、フランスを中心に古典学の「ジャンル」として定着したかのように思えたが、18世紀において、折から流行し始めた啓蒙思想がビザンツに決定的な負のイメージを付与してしまう。それについて、オストロゴルスキーの有名な『ビザンツ帝国史』から一節を引用してみよう⁶⁾。

啓蒙時代は、理性、抽象的な道德主義、そして宗教的な懐疑主義を誇り高く標榜し、世界史における中世という時代全体を軽蔑し、見下した。啓蒙思想家達は、保守的で頑迷なビザンツ帝国の精神を特に嫌悪した。ビザンツ帝国の歴史は、彼らにとっては、「空虚な長口舌と奇跡の、価値の無い集積」以外のなにものでもないし（ヴォルテール）、「革命と暴動、それに卑劣な言動で織られた織物」以外のなにものでもなかった（モンテスキュー）。その歴史は、せいぜい良くても栄光あるローマ史の悲劇的エピローグに過ぎなかった。シャルル・ルボアの『末期ローマ帝国の歴史*Histoire du Bas Empire*』、およびエドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*』の名前は、共に良く知られているが、両書ともビザンツの歴史をローマ帝国の千年にわたる衰退の歴史と捉えている。ギボン自身がその著書の中で、「自分は、野蛮と宗教の勝利をこの著書の中で描いたのだ」と言っている⁷⁾。

16世紀に古典研究として始まったビザンツ研究が、その揺籃の地である西ヨーロッパにおいて、人間理性の普遍性を確信する啓蒙思想家たちから断罪されたことは、研究のその後の進展を阻む極めて大きな打撃となった。18世紀後半から19世紀前半にかけては、ギリシア古典の価値を高く評価する啓蒙思想に加え、ロマン主義や自由主義の流行もあって、西欧の人びとの関心はさらに強くギリシア古典文化へ向けられた。こうした西欧における親ギリシア思潮、すなわちフィルヘレニズムを熱烈な政治運動に転化させたのが、西欧とギリシアの知識人の双方から、古代ギリシア人の末裔の自由と独立を求める戦いとして位置づけられたギリシア独立戦争であった⁸⁾。

啓蒙思想家による断罪、そして続くフィルヘレニズムの高揚によって、

長らく下火となっていたビザンツ研究が再び盛んに行われるようになったのは、事物の歴史的生成過程を重視する歴史主義の思潮が生じてきた19世紀後半である。歴史主義の本場であるドイツや隣国オーストリアはもちろん、人文研究の長い伝統を誇るフランス、イギリスでもビザンツ研究は復活し、多くの学者が活躍し始めた。また、ロシアと、1832年に独立を達成したギリシア国家でもビザンツ研究が行われるようになった。ロシアは自国の形成、発展の歴史を探る上で、ビザンツの歴史を参照することが不可欠であったし、ギリシアにとっては、公的には古代ギリシアとの連続性がより重要であるといっても、正教を奉じ、ギリシア語を話す人々から構成されたビザンツの歴史は自らの直接的過去に違いなかったからである⁹⁾。

20世紀前半にかけて、イタリアやベルギー、バルカン・東欧諸国、そしてアメリカでも研究が本格的に開始され、20世紀後半にかけては、北欧諸国やオーストラリア、さらには日本、中国でも研究が行われるようになり、現在にいたっている。はじめに触れたように、ビザンツに関する研究雑誌が膨大に存在するのは、以上のようなビザンツ研究の発展とその国際性によるものなのである¹⁰⁾。

ところで、先にオストロゴルスキーの文章を引用して、啓蒙主義的なビザンツ史観がその後のビザンツ研究に与えたダメージについて言及した。オストロゴルスキーは、ギボンの著作を取り上げ、それが「特に優れた文章力の故に、同時代および後代の人々に強い影響を与え、ビザンツ研究の意欲をほぼ一世紀にわたって麻痺させた」とし、その打撃と衝撃の大きさを物語っている¹¹⁾。実際、ギボンの著作がいかなるインパクトを当時の研究状況に与えたのか測定することは難しいが、文明と野蛮を対置し、それぞれに理性と宗教(非理性)を対応させる思考法は、まさしく啓蒙の時代に固有のものであり、彼やルボーのビザンツ観は広く受け入れられる素地を有していた¹²⁾。

確かにオストロゴルスキーも指摘するとおり、ギボンを典型とする啓蒙主義者たちのネガティブなビザンツ観を学問的な誤謬や、偏見にまみれた歴史観だとして、いまさら強く批判しても仕方ないであろう。そうした言説は過ぎ去った啓蒙の時代の産物なのであり、例えば、文化を扱う現代の歴史家たちにとってみれば、それは当時の文化状況や政治思想

を読み解くためのテキストの一つなのである。けれども、近代におけるビザンツ研究の歴史の中で、さらには近代ヨーロッパの歴史の中で、古代ギリシア観の裏返しともいうべき啓蒙主義的ビザンツ観が極めて強固なイデオロギーとして存在してきた事実には十分注意しなければならない。

以下では、前世紀に活躍した高名なビザンティニストを何人か取り上げ、その研究に現れたビザンツ観が啓蒙主義的ビザンツ観とどのような関係にあるのか、いささか簡単にではあるけれども検討してみよう。

まず、20世紀ドイツ・ビザンツ史学界の巨人、H・G・ベック。渡邊金一氏の精力的な紹介によってわが国でもよく知られているこの研究者は、ビザンツの神学を皮切りに、思想や文学、社会や国制にいたるまで、幅広い領域にわたって重要な論考を多く著した。とりわけ1960年代以降、彼は、当時の国際学界をにぎわしていたビザンツの社会経済、とりわけ封建制をめぐる諸論争にコミットすることなく、ビザンツをビザンツたらしめる要素、すなわち国制やイデオロギーをめぐる問題の解明に専心した。元老院、軍隊、民衆といった共和政ローマ以来の要素がビザンツ千年の歴史を通じて大きな役割を担ったことを強調する一方で、彼は、従来研究者によって多用されていた「帝国理念」に代わる語として「政治的オルトドクシー（正教／正統性）」という語を用いて、ビザンツ国家と社会の特質を説明するようになった。この政治的オルトドクシーというキー概念で、ビザンツから現代の東欧・東南欧世界までを論じた講演論文「ヨーロッパ史の周辺 モデル・ビザンツ」に、ベックのビザンツ観が凝縮されているといっても過言ではない¹³⁾。

ベックは、まず、ヨーロッパにおける「中央」意識の発展によって、いかにビザンツがヨーロッパの中の周縁的な位置に追いやられ、些末なものとして扱われてきたかを論じ、次いで、ビザンツの構造としての政治的オルトドクシーの説明に移る。

政治的オルトドクシーは、コンスタンティヌス大帝によるキリスト教の公認に由来し、「信仰像と政治理念との、典礼儀礼と世俗上の行動様式との、教義と国制原理との、政治と神学との、独自の、ほとんど余すところのなき完全なかみ合い」を特徴とするものであった¹⁴⁾。それでは、ビザンツ社会におけるその具体的様相とはいかなるものか。少々長くな

るが、ベックの声に直接耳を傾けてみよう。

政治的オルトドクシーの誕生は教義上のオルトドクシーが完成の域にたつることができるはるか以前である。この完成までには幾世代もが必要である。そのために支払われる代償は、聖書伝統および原始キリスト教伝統との自由かつ創造的な対話の放棄であり、不寛容であり、すべての定式句のおどろくべき不毛化である。そうなると、拳句のはてに確保されたところの、意見一致できた財産は、どうしてもひきつづき確保しなければならない。解釈をしたいようにさせ、理論的好奇心のなすがままにまかせることは許されない。神学が今後使命とするのは、獲得されたものを新しく熟考し直すよりむしろ、それを絶えず繰り返して確認することである。オルトドクシーと取組むことが危険になるのは、定式句がますます微妙になったからであり、そのなかにもつれこむおそれがますます増大したからであり、論争の敵方にごくささいな独自の思考をみつけ出しては異端のレッテルを貼りつける快感がますます熾烈となったからである。敬虔な信者はかげに退く。その或る者は、神秘主義の、秘密にみちた世界のなかに沈潜していく。神秘主義は、未開拓の敬虔な信仰心を教義がほとんど動員できないため、教義のかたわらで自らの教説を展開したのである。他方、並みの平信者は、極度に劇的に構成され、増幅されたところの典礼の実践に身をゆだねる。慰めと恵みを与えてくれるアイコンに、感じとれることができ、手さぐりすることができるすべてに、ほとぼしる情念をこめてすがりつく。こうしてかれらは、外在的、超越的な諸力によって仕草や律動が定められている一つの世界であると同時に、恐ろしい力にあふれたデーモンたちと、奇跡、祝福をたれる聖者たちとのたたかいによって仕草や律動が定められている一つの世界の、処世の道を獲得する。かくて発生するのはピトレスクな一つの世界である。生活のすべての局面にレッテルを貼りつけるところの、観念と行動様式の一複合体である¹⁵⁾。

ベックの説明は、ビザンツにおける政治的オルトドクシーがやがてはビザンツの民族的アイデンティティの核となり、さらにはそれがスラヴ諸民族へ輸出、受容されたことにより、東欧、東南欧で独自の文化圏が形成されたと続いていくが、ここではその展開自体は重要ではない。重

要なのは、ベックが政治的オルトドクシーという語で描くビザンツ像が、啓蒙思想家たちのそれ、とりわけギボンのそれに極めて近い地点にあるということである。西欧の知的伝統に立脚し、理性的思考を崇拝するギボンがビザンツの宗教にまったく価値を認めなかったように、ベックもビザンツの宗教に、政治的オルトドクシーの社会的な機能を見る以外は、なんら価値を認めていないのである。政治的なオルトドクシーの成立によって、西欧的な発展を閉ざされ、高度に固定化され、儀礼化された世界。いうなれば、ベックのビザンツの政治的オルトドクシー概念は、ギボンの「野蛮と宗教の勝利」を形而上学的、非歴史的にいい換え、正教スラヴ諸国にも敷衍したものに過ぎないのである。

ドイツ古典学の伝統のもとに育ったベックが、西欧の「中央」概念、ないし啓蒙主義的ビザンツ観に深くとらわれていたことは、その他の業績からも確認できる。文学研究において、彼が高く評価するのは、近代ギリシア文学に連なるような俗語文学の萌芽・発展と、テオドロス・メトキテスやマクシモス・プラヌデスのような高度な教養を備えた人文主義者たちの文学作品であり、聖人伝、護教文献といった伝統的宗教文学は評価のカテゴリーに入らない¹⁶⁾。また、社会史・国制史研究において、元老院、軍隊、民衆とならんで評価されるものは、皇族・貴族らの従者団や、せいぜい貴族化した教会聖職者までであって、修道士は入らない¹⁷⁾。奇妙なことにというべきか、初めから定められていたというべきか、ビザンツの神学研究を最初のテーマとした彼は、いわばビザンツ文化のコアとでもいうべき宗教的なもの、神学、宗教文学、修道士を一切評価しない地点にたどり着き、政治的オルトドクシーという造語でギボンのなビザンツ観を表明するにいたったのである。

次に、ギリシア人ビザンツ史家H・アルヴェレールの『ビザンツ帝国の政治的イデオロギー』を取り上げてみよう¹⁸⁾。アルヴェレール(旧姓グリカヅィ)は、ギリシアに生まれ育ち、1950年代半ばよりフランスに移って、ビザンツ中期の行政・軍事史を中心に研究活動を行うようになった歴史家である¹⁹⁾。コンスタンティノーブル遷都から1453年の滅亡にいたるまでのビザンツの政治的イデオロギー、および国制の基本原則を論じたこの著作は、ビザンツ帝国を自国史の一部とするギリシア人歴史家のビザンツ観を知る上で、興味深い事実を提示している。

ベックの特徴を、ビザンツの国制理念の特質を静態的、形而上学的に抽出しようとした点に求めるとするなら、アルヴェレールの特徴は、政治的イデオロギーの変遷を歴史的に跡づけようとしている点であろう。大ビザンツ主義とでも表すべき普遍的帝国主義と、小ビザンツ主義とでもいうべきビザンツ・ナショナリズムの相克というように、いささか国家政治におけるイデオロギーを単純化して把握している嫌いはあるが、ビザンツ末期にかけてのヘレニズムや正教的愛国心の高揚といった諸傾向については特徴をうまく捉えている²⁰⁾。

内容紹介はさておき、アルヴェレールの記述自体を見てみよう。ニカリア帝国や滅亡を前にした末期ビザンツについての記述には、混乱期のギリシアで生まれ育ったアルヴェレール自身の個人的心情や経験が色濃く投影されている。例えば、近代ギリシアにおける大理念(メガリ・イデア)の起源を、1204年のコンスタンティノープル陥落に求めて彼女は次のように書く。

ある人びとは再征服されたコンスタンティノープルに普遍世界的、帝國的な新ローマを見出そうと期待し、別の人びとはそこに新エルサレム、真の反ローマを見る。1204年直後にギリシア人民のコンスタンティノープルへの夢が築かれたのは、このような曖昧さの上にてであり、この夢は別に「大理念」という呼び名で知られる一つのイデオロギーを生んだ。長いあいだビザンツ人をはぐくみ、アギア・ソフィア聖堂上に十字のギリシア国旗がひるがえるのを見たいと願う過激な人びとを、今日にいたるまで活気づけることをやめなかった新ギリシア愛国心の基礎にあるのは、このイデオロギーである。盲目的調子をもつ大理念というこのイデオロギーは、西方のキリスト教帝国主義への応答として生まれたのであり、いささかもトルコ人に対してでないということは運命の皮肉である²¹⁾。

彼女は、明らかに近代ギリシアにおける政治的イデオロギーの複数性と現実の混乱した政治状況を念頭に入れた上で、執筆している。すなわち近代ギリシアには、大雑把に言って、西欧を向いた知識人、富裕層を主体とするギリシア・ナショナリズムと、民衆、教会によって担われたビザンツ的、正教的なナショナリズムが並存し、二つの潮流は現実の政治の場で激しく対立していた。しかし、1922年、首相エレフセリオス・ヴェニゼロス指導の下で大理念を具現化すべく開始された小アジア侵攻

が完全な失敗に終わり、ビザンツ復興の夢が潰えたことで、後者のビザンツのナショナリズムは次第に退潮していった²²⁾。1924年に生まれたアルヴェレールは、小アジアの悲劇を直接見知っていたわけではないけれども、おそらく知識人的ナショナリズムに立脚して、大理念を民衆的で盲目的なナショナリズムとして批判しているのである。

彼女のギリシア知識人としての自負と心情はビザンツの滅亡に言及するときにより明確に現れる。

古風な潮流の代表者たちがローマや西方との接近に努め、他方、民衆的、教会的潮流の人々が、反ラテン感情で盲目にされてトルコ人に近づくこともためらわなかったことは、何ら驚くにあたらない。ビザンツ最後の大公の口から出た驚くべき言葉、「私は市内でラテン人の教皇冠を見るよりは、トルコ人のカフタン（毛皮付マント）を見るほうがいい」を位置づけるべきなのは、このような激情的雰囲気の中にあると、私には思われる。その言葉の乱暴さと大胆さとが、征服直前のコンスタンティノープルにみなぎっていた緊張を見事に示している。この言葉は、教会、人民、そしてビザンツの政府さえをも害した盲目性の証拠であり、ビザンツ政府も最後には、教会の道理は国家の道理や利益に優先すべきであるということを含めたのである。周知のように、その結果は、ギリシア人民がたちなおるのに四世紀以上をかけることになる1453年の破局であった²³⁾。

教会も、人民も、政府も反ラテン感情に毒され、盲目であったがゆえに、ビザンツは滅亡した。ビザンツの滅亡は、社会経済的要因によってというよりもむしろ、ビザンツ人の愚かさにこそ求められる。ビザンツ存続の道は、ビザンツの西欧化、世俗化にこそ求めなければならなかった。こうして、末期ビザンツをめぐる記述のうちに開明派ギリシア知識人としての自意識を表明したアルヴェレールは、ギリシア人でありながらビザンツを嫌悪した啓蒙期の学者アダマンディオス・コライスと同様、ギボンの結論に行き着いてしまうのである²⁴⁾。

実際、もっとも重要なものだけしか引用しなくても、静寂主義（ヘシカスム）、パラマス主義、教会合同主義、反教会合同主義というようなパラオロゴス期にコンスタンティノープルを揺るがしていた教会的、宗教的争いの強さは、ビザンツの人びとがもっぱら心を奪われていた事柄の決定的傾向を示している。すべてはビザンツ

人が、これ以降は帝国の生命に関わる諸問題について、例えば平和とか住民の安全とかのような成功の見込みがある解決を見出す能力がなくて、知的満足や哲学的思弁や、彼らがいつもぬきこんでいた精神的情熱の中に逃げこんだということを感じさせるに十分である。不毛な、往々にしてとるにたらぬ諸問題についての論争が、帝国の貧弱な力を引き裂き、人びとを熱中させて、人びとはあらがいがたく滅亡へと進んだ²⁵⁾。

ここまでドイツとギリシアのビザンツ史家をそれぞれ一名取り上げて、そのビザンツ観を探ってきたが、東欧、とりわけ正教スラヴ諸国のビザンツ史家たちの場合はどうなのであろうか。歴史的背景からして、彼らがベックやアルヴェレールとは異なるビザンツ観を抱いていたことが予想されるが、実際、彼らのビザンツ観は独特のものであった。彼らがビザンツを研究するに際して採用し、やがて主流となった方法は、美しい叙述を重視するロマン主義的で啓蒙主義的な西欧の歴史家のものでも、民族主義的なギリシアの歴史家のものでもなく、ヘーゲルの歴史哲学を継承・発展させ、歴史は唯物論的な科学であると標榜したマルクス主義のそれであった。そこには、古代ギリシアへの憧憬といったノスタルジーやロマンティズムが介在する余地はほとんどなかったといえよう。しかし、それでも東欧の学者、とりわけソヴィエト政権の樹立後に研究生生活を開始した学者たちは、マルクス主義的な枠組みの中で、ビザンツの歴史を救出しようと試みた。

従来、マルクス主義的歴史観は、西欧における社会構成と生産様式の発展過程（古代の奴隷所有制から中世の封建制、中世の封建制から近世以降の資本主義制へ）を基準とし、非西欧世界の近代を古代・中世的な社会・経済構造にとどまる未発展なものとして捉えた。

これに対して、ビザンツを再評価するためにソヴィエトのビザンツ史家たちが展開したのは、古代的な専制国家として理解されたビザンツにおいて、西ヨーロッパにおいて見られたような封建的社会関係が存在したという議論であった。封建化の開始・展開過程については研究者間で相違があったが、遅かれ早かれビザンツが封建化していくと捉える点で彼らは一致していた。歴史的な諸条件が異なっていたので、資本主義的な近代を迎えることはなかったが、ビザンツは西欧的な中世を経験して

いた。20世紀半ばの国際ビザンツ学界に百家争鳴的な状況を作り出したこの学説は、古代専制国家の中世的残存として断罪されたビザンツを、封建制の存在を指摘することで西欧と同列に置こうとするものだった。そうすることで、ソヴィエトのビザンツ史家たちは、ヘーゲル哲学を介してマルクス主義の中に流れ込んだ西欧中心主義的、啓蒙主義的なビザンツ観に、同じ土俵の上で抗ったのである。結局、ビザンツにおける国家理念やフィスカリテの存続を説く学説（非社会主義圏の）が優勢を占めるようになり、また、西欧に比して圧倒的に少ない史料から封建制を語ることは是非が冷静に問われ始め、一斉を風靡したビザンツ封建論争は国際学界から姿を消していった²⁶。

マルクス主義的なビザンツ観は、政治史と社会経済史を結合させる独自の史学を展開したオストロゴルスキーの中にも流れ込んでいる。そのことは、彼がビザンツ後期に出現したプロノイアを西欧の封土と同一視し、それを躊躇なくビザンツ封建化の指標とみなした事実如実に示されている²⁷。しかし、彼は、ビザンツの政治、制度、社会における変革と発展を強調した点で、ソヴィエト・ビザンティニストたちと一線を画すことになった。

オストロゴルスキーのビザンツ理解にとって、希望の星となったのは7世紀前半に帝国を支配したヘラクレイオス帝である。彼は、ヘラクレイオスの登位前の混乱に触れながら以下のように述べる。

フォーカス帝治下の無政府状態の日々は、後期ローマ帝国の歴史の終章といえよう。これを以って、後期ローマ時代ないし初期ビザンツ時代は、終わりを告げる。ビザンツ帝国は、この危機の時代の中から全く新しい国家として生まれ変わる。ビザンツ帝国は、崩壊の危機に瀕した後期ローマ帝国時代の国家の遺産から解放され、新しい力により補強された新生国家として登場してくるのである。ここに本来の意味でのビザンツ帝国の歴史、即ち、中世ギリシア帝国の歴史が始まる²⁸。

いうまでもなく、これはオストロゴルスキーの、ギボンの解釈への強力なアンチテーゼである。オストロゴルスキーは、ビザンツの歴史をローマの歴史と連続して捉える従来の見方に対し、7世紀以降のビザンツが、独自の発展相と衰退相をあわせ持つ、ローマ帝国と多くの点で断絶した新生国家という史観を提示したのである²⁹。しかし、この史観はオ

ストロゴルスキーの名声を大いに高めた一方で、彼自身のその後の研究にとっては躓きの石となるものだった。すなわち、彼は、新生ギリシア帝国の始祖たるヘラクレイオスとその「改革」を評価し続けなければならなくなったのである³⁰⁾。

オストロゴルスキーによれば、ビザンツが新生国家として蘇ることができたのは、ヘラクレイオスがテマ制の創出という一大改革を行ったためである。ササン朝ペルシア軍の小アジア侵攻を前にして、ヘラクレイオスが取った方策は、民事と軍事を区分する後期ローマ式の属州行政システムを廃止し、ビザンツ領小アジアをいくつかの管区(テマ)に分け、軍民両権をテマ軍総司令官(ストラテゴス)に委ね、テマ軍の主力を、高額な給金を必要とする外国人傭兵から、軍務と引きかえに保有地を与えられた農民兵に代えることだった。こうして行政と軍隊を再編したヘラクレイオスはペルシア軍の撃退に成功した³¹⁾。

この壮大な学説は、ビザンツ史家には馴染み深いテマ制起源論争における、いわゆる「ヘラクレイオス改革説」である。ヘラクレイオスによるテマ制創出を示す史料が存在しないにもかかわらず、また多数の研究者がローマ末期とビザンツ中期の制度的連続性を重視する「漸次発展説」を支持するようになって、彼はあくまで「ヘラクレイオス改革説」にこだわりつづけた。無論、それは彼のビザンツ観に強く由来するものである。オストロゴルスキーは、ビザンツ国家の改革と発展を余りに積極的に見出したかったがために、史料の裏づけの乏しいグランド・セオリーを構築してしまったのである³²⁾。

ここまでの考察では、20世紀中葉から後半にかけて活躍したドイツ、ギリシア、ロシアの代表的ビザンツ史家に啓蒙主義的な歴史観が影のようにつきまとう様相を見てきた。彼らの事例は、啓蒙の時代から二世紀を隔ててなお、ビザンツ史家が意図せずして啓蒙主義的な価値観に左右されたり、あるいはそれと意識的に対決したりする必要があったということを明確に示している。しかし、20世紀のビザンツ学は、他の諸学問と同様、自らを省みることで内在する問題と課題を発見し、そこから新たな方向性を探る力を持ち合わせていた。

啓蒙主義的ビザンツ観への挑戦というコンテクストで、オストロゴルスキーと同程度、あるいはそれ以上のインパクトを学界に与えたのは、

現在世界で最も注目されている歴史家の一人P・ブラウンである³³⁾。厳密に言えば、彼が対決を挑んだのは、啓蒙主義的・ギボン的な古代末期観であったのだが、彼が一般的にはローマ末期とかビザンツ初期と表される時期の北アフリカ、および地中海東方地域を研究対象としていたため、ビザンティニストたちからも注目を集めるようになった³⁴⁾。

彼が優れて革新的であったのは、宗教とそれに関わる諸現象、行為、心性を、何らかの文化的・社会的な意味を持つものとして分析対象に据えたことであった。つまり彼は、政治や社会経済の視点から啓蒙主義的な歴史観に異議を唱えようとしたのではなく、啓蒙主義的な歴史観では、古代人や中世人の迷信や非合理性を象徴するものとして断罪されてきた宗教そのものを取り上げ、新たな方法論を用いて新たな解釈を提示して見せたのである³⁵⁾。

当初、アウグスティヌス、およびアウグスティヌス時代の北アフリカ社会の研究³⁶⁾を行っていたブラウンが、ビザンツ研究者から俄かに注目を集める存在となったのは、1971年に*Journal of Roman Studies*に発表した「古代末期における聖人の登場と機能」³⁷⁾と、1973年に*English Historical Review*に発表した「暗黒時代の危機 聖像破壊論争の諸局面」³⁸⁾によってであろう。

まず前者の論文でブラウンは、古代末期のシリアにおいて数多く存在したキリスト教聖人を取り上げ、彼らの担った社会的な価値や機能がいかなるものであったか、現存する聖人伝を中心史料として考察した。そして彼は、文化人類学や宗教社会学の成果をも参照しながら、民衆とエリート層の双方から尊崇されていた聖人が、国家行政が機能不全におちいったシリア社会の中で、秩序維持的機能を果たす存在であったと高く評価し、また、聖人現象が古代末期の宗教史における新局面を示すものとして、従来のネガティブな聖人イメージと古代末期イメージの双方に修正を迫った。

次いで後者の論文において、彼は、原因と性質をめぐって、従来さまざまな見地から研究されるも決定的な結論を欠いていた聖像破壊論争の問題に、前論文と同様、社会人類学的、権力論的視点を導入した。すなわち、ビザンツ世界において次第に広まったイコンが、古代末期世界の聖人と同様の心的・社会的機能を持つとし、アラブ軍の侵攻で劣勢に立たされ、帝国再編の必要を迫られたビザンツの諸皇帝が、象徴的権力を

も皇帝に一元化するためにイコンの禁止と破壊を図ったと主張したのである³⁹⁾。

古代末期史家ブラウンが、地中海東方地域の聖人たちに関心を向けたとき、ギボン的な歴史観の伝統に強いフラストレーションを感じたことは間違いない。彼は、前者の論文の序文において、従来の社会史的、宗教史的な聖人研究は聖人現象の現実そのものを明らかにするものではなかったと指摘する。そして、そうした研究の背後にあるギボン以来の思想的な問題、すなわち聖人現象や民衆文化を蔑視し、エリート的なギリシア・ローマ文化のみに価値を求める発想（ギボン的であり、進化論的であり、ロストフツェフ的な）を鋭く批判しているのである⁴⁰⁾。

ただ、70年代におけるブラウンの研究には、聖人にせよ、イコンにせよ、その後論じた西欧の神判にせよ、対象を機能主義的に捉える傾向があったのは否めない⁴¹⁾。これは彼が啓蒙主義的な歴史観を克服し、古代末期研究を刷新するために採用した方法論に内在する問題であった。彼自身も書いているように、古代末期の東方世界に関心を抱いていく中で、彼は、『汚穢と禁忌（邦題）*Purity and Danger*』や『象徴としての身体（邦題）*Natural Symbols*』で知られる高名な人類学者メアリ・ダグラスと出会い、その宗教と社会の関係についての新しい方法論に大きな衝撃を受けた⁴²⁾。70年代のブラウンの機能主義的で理論的な色彩は、彼がダグラスの強い影響のもと、文化の優劣や高低を否定する相対主義的地平に立った上で、古代末期世界の研究を行ったことに由来しているのである⁴³⁾。

いずれにせよ、啓蒙主義的な価値観と対決する姿勢を打ち出し、所与の歴史的世界における宗教現象に文化の構造や独自性を読み取ろうとしたブラウンの研究は、社会経済史から次なる段階を模索しつつあったビザンツ学界においても次第に大きな反響を呼び、ビザンツの新たな宗教史や文化史の潮流を生み出す一つの重要な契機となったのである⁴⁴⁾。

今日にいたるビザンツ研究の歴史の中で、啓蒙主義的ビザンツ観はどのように変遷してきたのか。プロフェッショナルな思想家や言説史家ならばより徹底的に、より網羅的にテキストを分析し、言説や思想の変化を跡づけていくのだろうが、本稿での試みはアマチュアの手によるデッサンともいふべきものであり、全体像を提示するには程遠い。しか

し、18世紀の啓蒙主義的なビザンツ観が、20世紀の専門研究の場においても、消え去らない亡霊のように彷徨っていたこと、さらに、ブラウンの仕事に見られるように、文化や宗教への新しい視角によってビザンツ研究の中で地殻変動のようなものが生じつつあることを指摘できたのではと思う。

上述したように、啓蒙主義的ビザンツ観は、近世以降のフィルヘレニズムと表裏一体といえる関係にあった。啓蒙時代後期以来、知識人は、ギリシアの古代的価値を高く評価すればするほど、ギリシア人の中世国家であるビザンツに対して憎悪を強めた。ギリシア古典の遺産を継承しながら、彼らは迷信に熱中し、無益な争いを繰り返した。衰退と滅亡は必然である云々と。やがて西欧においては、近代的価値観と深く結びついたフィルヘレニズムの伝統は、教育や文化政策によって、いわば社会の中に構造化されることになった⁴⁵⁾。このフィルヘレニズム構造化の試みが、ビザンツへの嫌悪をも構造化するものであったことは想像に難くない⁴⁶⁾。

しかし、ビザンツが停滞のレッテルを貼られたものの、実際には絶えず変化していたように、ビザンツ研究とそれを取り巻く状況も絶えず変化している。以下、近年における最たる変化を三つ挙げておこう。

一つは、先述した20世紀後半からの研究関心の劇的ともいえる変化である。本稿では詳細に検討できなかったが、新たな道を切り開いたのは、ブラウンだけではない。文学研究ではカジュダン⁴⁷⁾、民俗・民衆文化ではM・アレクシウ⁴⁸⁾、政治史ではP・マグダリノ⁴⁹⁾、そして女性史・家族史のA・E・ライウ⁵⁰⁾らのように、新たな方法論と問題意識を持つ研究者たちが、文化相対主義を共通の基盤に、ビザンツの文化的独自性を歴史的に明らかにする作業に取り掛かったのである⁵¹⁾。

二つ目に、ビザンツ研究が、かつての母胎であった古典学から切り離され、独立した研究ジャンルとして定着しつつあること。20世紀前半から徐々に進行し始めたこの学問制度的傾向は、20世紀後半にかけてさらに加速し、今日、その制度的独立はほぼ達成されたといってもよいだろう。この古典学からの独立がイデオロギー的に見て極めて重要であることは、本稿での考察からも明らかであろう。ビザンツ研究を育んだ伝統的西洋古典学は、ギリシア文化の遺産のみを聖域化し、ビザンツにおける聖人や異端、民衆文化や保守神学、宮廷儀礼や祝祭といったものを長

らく軽視、あるいは蔑視してきたからである。

三つ目は、ギリシア系研究者の国際的活躍である。移民の子であったり、ギリシアからの留学生であったりと、背景はさまざまだが、ギリシア人がギリシア国外の研究拠点で研鑽を積み、国際学界で活躍する事例がここ何十年かで劇的に増加している。例えば、今日、イギリスやアメリカ、フランスやドイツといった欧米の研究拠点から出版される研究書の多くに、ギリシア系の著者名を見出すことができるし、筆者が留学したバーミンガム大学の研究所も、スタッフこそイギリス人が多いものの、大学院生の大半はギリシアやキプロスからの留学生であった⁵²⁾。この現象は、ビザンツ研究の過去を考えると極めて興味深い。なぜならそれは、ビザンツを研究対象として扱いながら、どこかに蔑視の感情を滲ませずにはいられなかった「ヨーロッパ」(ベックのいう意味での)の帝国主義的ビザンツ研究支配に対して、ギリシア系研究者が自国史を取り戻すべく、各地で戦っているようにも見えるからである。

こうした変化を見て分かるのは、現在のビザンツ研究において、ヨーロッパ中心主義・啓蒙主義的歴史観への反省に基づく文化相対主義と、ギリシア系研究者の活躍によるビザンツ研究の「ギリシア化」傾向という、二つの大きな潮流があるということである。そのうち筆者が特に気になっているのは、後者の「ギリシア化」の行方である。ギリシア系研究者は、自らもとらわれていた啓蒙主義的ビザンツ観を克服するため、「文化」に焦点を当てるといって、非ギリシア系ビザンツ研究者と同様の戦略を採用した。しかし、彼らは、主に民族的なルーツやアイデンティティの探求に動機づけられ、近代ギリシアの直接的起源をビザンツに見ている以上、自らの内なるギリシア・ナショナリズムから逃れることはできないのである。おそらくそう遠くない将来、ギリシア系研究者が、学問上の「コンスタンティノープル」を、トルコならぬ「ヨーロッパ」から奪回するときが来るであろうが、そのときは再度ビザンツ研究の方向性に、ヨーロッパとギリシア間の認識の差異を明確に示すような大きな変化が生じるのではないだろうか。

注)

1) 第207号、2003年、95頁。

2) 1976年にイギリス国内で最初に創設されたビザンツ研究機関。現在の正式

- 名称はThe Centre for Byzantine, Ottoman and Modern Greek Studies。
- 3) ランシマンには以下の3点の邦訳がある。護雅夫訳『コンスタンティノープル陥落す』(新装版)、みすず書房、1998年(*The Fall of Constantinople*, Cambridge, 1965)、和田廣訳『十字軍の歴史』河出書房新社、1989年(*The First Crusade*, Cambridge, 1980)、榊原勝、藤澤房俊訳『シチリアの晩禱、13世紀後半の地中海世界の歴史』太陽出版、2002年(*The Sicilian Vespers: A History of the Mediterranean World in the Later Thirteenth Century*, Cambridge, 1958)。
 - 4) “Pioneers in Byzantine Studies in the United States”, 27(2002)。
 - 5) ヴォルフについては、ベックによる以下の論文をも参照されたい。H.-G. Beck, “Hieronymus Wolf”, *Lebensbilder aus dem Bayerischen Schwaben*, 9(1966), pp. 169-193。
 - 6) オストロゴルスキーの経歴については、和田廣氏による邦訳『ビザンツ帝国史』後書きよりも、渡邊金一氏による次の論文が詳しい。渡邊金一「なぜまたビザンツなのか - ゲオルグ・オストロゴルスキー著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』恒文社、2001、の刊行によせて - 』『一橋論叢』第127号第3巻、2002年、1-17頁。渡邊氏の論文は、オストロゴルスキーの学問遍歴のみならず、わが国におけるビザンツ研究開始時の状況や、近年の国際学界の動向についても触れており、参考になる。ここでのビザンツ学の歴史の紹介は、主にオストロゴルスキーによったが、H.-G. Beck, *Das Byzantinische Jahrtausend*, Munich, 1978, pp. 11-32も有用。
 - 7) 一部、筆者訳。ゲオルグ・オストロゴルスキー著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』恒文社、2001年、15-16頁(G. Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staates*, 3rd ed., Munich, 1963)。
 - 8) 近代ギリシア史の研究はそれこそ膨大にあるが、邦語で読めるものの中では、R・クログ著、高久暁訳『ギリシャ近現代史』新評論、1998年(R. Clogg, *A Concise History of Greece*, Cambridge, 1992)が、政治・外交のみならず、ナショナル・アイデンティティの問題についても十分触れている点で優れている。他、政治外交史に力点がおかれた、C・M・ウッドハウス著、西村六郎訳『近代ギリシア史』みすず書房、1997年(C.M. Woodhouse, *Modern Greece: A Short History*, 5th ed., London, 1991)も基本文献の一つ。周藤芳幸、村田奈々子著『ギリシアを知る事典』東京堂出版、2000年の近代ギリシアを扱った第12 - 16章も、比較的最近の状況まで

おさえていて参考になる。ただし、この書物は、伝統的ギリシア観に与するものではないであろうが、古代と近現代の叙述のみで、ギリシアのビザンツ的過去が構成から除外されている。18世紀から19世紀にかけての西欧におけるフィルヘレニズムについて、邦語では藤縄謙三「近代におけるギリシア文化の復興」、藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993年、221-251頁が最良のものである。ギリシア愛好者(フィルヘレン)の活動については、C.M. Woodhouse, *The Philhellenes*, London, 1969やD. Dakin, *British and American Philhellenes: During the War of Greek Independence, 1821-1833*, Thessaloniki, 1955などが基本文献。

- 9) オストロゴルスキー、前掲書、17-37頁。近代ギリシアにおけるビザンツ研究の草創期については、以下の論文が詳しい。G. Huxley, "Aspects of modern Greek historiography of Byzantium", in: D. Ricks and P. Magdalino eds., *Byzantium and the Modern Greek Identity*, Aldershot, 1998, pp. 15-23; P.M. Kitromilides, "On the intellectual content of Greek nationalism: Paparrigopoulos, Byzantium and the Great Idea", in: *ibid*, pp. 25-33.
- 10) わが国のビザンツ研究の歴史については、筆者の次の論文を参照されたい。H. Hashikawa, "Byzantine studies in Japan: A historical review", *Bulletin of British Byzantine Studies*, 29(2003), pp. 89-105.
- 11) オストロゴルスキー、前掲書、17頁。
- 12) 近年、イギリスの政治思想家ポーコックはギボン自体を思想史・言説史的に分析した研究を発表している。J・G・A・ポーコック「ギボンの『ローマ帝国衰亡史』と啓蒙後期の世界観」、同著、田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房、1993年、268-298頁(J.G.A. Pocock, *Virtue, Commerce, and History: Essays on Political Thought and History, chiefly in the Eighteenth Century*, Cambridge, 1985)、および彼の *Barbarism and Religion, vol. 1: the Enlightenments of Edward Gibbon, 1737-1764*, Cambridge, 1994と *Barbarism and Religion, vol. 2: Narratives of Civil Government*, Cambridge, 2000を参照されたい。ちなみにポーコックの『野蛮と宗教』シリーズの第3巻は今秋刊行予定となっている。*Barbarism and Religion, vol.3: The First Decline and Fall*, Cambridge.
- 13) H・G・ベック、「ヨーロッパ史の周辺 モデル・ビザンツ」、同著、渡

邊金一編訳『ビザンツ世界の思考構造 文学創造の根底にあるもの』岩波書店、1978年。ベックの業績については、同書の付録として収められた渡邊氏の「ビザンツにおけるイデオロギーと社会的現実 H・G・ベックの若干の業績に寄せて」、197-219頁、および「ビザンツ理解への道 H.-G. Beckの二点の近業」『南欧文化』3号、1976年、40-56頁、『コンスタンティノーブル千年 革命劇場』岩波書店、1985年などが参考になる。また、A. Kazhdan, “In search for the heart of Byzantium: about several recent books on Byzantine civilization”, *Byzantion*, 51(1981), pp. 320-332も有用である。わが国においては、渡邊氏のベックへの傾倒が、ベックのビザンツ理解と非ベックのビザンツ理解のイデオロギー的対立という局面を導いた。契機となったのは、唯物論的立場から書かれた井上浩一氏の『ビザンツ帝国』の出版である。これに、ベック対オストロゴルスキー、ベック対カジュダンという代理戦争的な構図を見て取ることも可能である。井上浩一著『ビザンツ帝国』岩波書店、1982年と、渡邊氏の書評『史学雑誌』92編2号、1983年、91-101頁、および井上氏の反批判「ビザンツ史研究の課題 渡邊金一氏の書評によせて」『史学雑誌』92編7号、1983年、109-117頁と、同氏の「ビザンツ帝国の国制と社会」『比較国制史研究序説 文明化と近代化』柏書房、1992年、157-173頁などを参照されたい。なお、イギリス人ビザンツ史家アンゴールドは、近著で、ベックの『ビザンツ千年*Das Byzantinische Jahrtausend*』が重要であるとしながら、それが国際的には十分な影響力を持ちえていないことを示唆している。M. Angold, *Church and Society in Byzantium Under the Comneni, 1081-1261*, Cambridge, 1995, p. 2.

- 14) H・G・ベック、「ヨーロッパ史の周辺 モデル・ビザンツ」、14頁。ちなみに訳は、原文を入手することができなかつたため、渡邊氏らのものに従っている。
- 15) 同、18-19頁。
- 16) 文学研究におけるベックの主要著作には、*Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich*, Munich, 1959や*Geschichte der byzantinischen Volksliteratur*, Munich, 1971などがある。
- 17) Cf. H.-G. Beck, “Kirche und Klerus im staatlichen Leben von Byzanz”, *Revue des Etudes Byzantines*, 24(1966), pp. 1-24; idem, *Das Byzantinische Jahrtausend*, Munich, 1978; A. Kazhdan, op.cit., pp. 326-

332.

- 18) H. Ahrweiler, *L'idéologie politique de l'Empire byzantin*, Paris, 1975. 邦訳は、尚樹啓太郎訳『ビザンツ帝国の政治的イデオロギー』東海大学出版会、1989年。以下の引用部分では、基本的には尚樹訳に従っている。頁数は、邦訳のもの。
- 19) 主著は、*Byzance et la Mer: La Marine de Guerre, la Politique et les Institutions maritimes de Byzance aux VIIe-XVe Siècles*, Paris, 1966、*Etudes sur les Structures administratives et sociales de Byzance*, London, Variorum Reprints, 1971、*Byzance, les Pays et les Territoires*, London, Variorum Reprints, 1976など。
- 20) ビザンツの政治思想についてはアルヴェレールのほかに、F. Dvornik, *Early Christian and Byzantine Political Philosophy: Origins and Background*, Washington, D.C., 1966などが基本文献。11、12世紀頃からのビザンツにおけるヘレニズム / ヘレネス意識の発展については、多くの文献がある。英語に限定すれば、A. Vacalopoulos, trans. by I. Moles, *Origins of the Greek Nation: The Byzantine Period, 1204-1461*, New Brunswick, N.J., 1970や同、trans. by I. and Ph. Moles, *The Greek Nation, 1453-1669: The Cultural and Economic Background of Modern Greek Society*, New Brunswick, N.J., 1976、および近年のものでは、P. Magdalino, "Hellenism and Nationalism in Byzantium", in: idem, *Tradition and Transformation in Medieval Byzantium*, Aldershot, Variorum Reprints, 1991, article XIV, pp. 1-29などが重要。
- 21) H・アルヴェレール、前掲書、114頁。
- 22) オスマン領小アジアには、沿岸部から内陸にいたるまで多くのギリシア人コミュニティが存在していた。第一次大戦終結後の1919年、ヴェニゼロスは、小アジア西部スミルナのギリシア人保護を名目に、軍団を小アジアへ派遣した。ギリシア軍はスミルナを占領した後、小アジア西部を支配下におき、アンカラ付近の内奥部まで進出したが、ムスタファ・パシャによって再編されたトルコ軍の強力な反撃にあった。結局、ギリシア軍は敗走し、1922年9月、小アジア進出の拠点スミルナから撤退した。トルコ軍のスミルナ再占領の際、放火と虐殺が行われ、スミルナのギリシア人コミュニティは壊滅した。ギリシア人とアルメニア人あわせて3万人の犠牲者が出たといわれている。クロググ、前掲書、81-85頁。

- 23) アルヴェレール、前掲書、127-128頁。
- 24) コライス（1748-1833）は、スミルナに生まれ、後半生はパリで活躍したギリシア人学者。フランスの知識人と交わり、古典学研究に打ち込むかわら、古典教育によるギリシア人の覚醒、独立を説いた。S.G. Chaconas, *Adamantios Korais: A Study in Greek Nationalism*, New York, 1968を参照。
- 25) アルヴェレール、前掲書、130頁。
- 26) 1950、60年代のソヴィエト・ビザンツ学について、わが国でその動向を注視し、積極的に紹介したのは渡邊金一氏である。ビグレフスカヤ他著、渡邊金一訳『ビザンツ帝国の都市と農村 4～12世紀』創文社、1968年と、渡邊金一「ビザンツ封建制の諸問題 論争の展望」、同著『ビザンツ社会経済史研究』岩波書店、1968年、3-50頁は当時の状況を知る上で重要。米田治泰「「ビザンツ封建制」研究の動向」、同著『ビザンツ帝国』角川書店、1977年、119-139頁も参考になる。後にカジュダンは、自著の序文で、かつてのソヴィエト・ビザンツ学界に政治的問題のみならず、思想的偏向性があったことを率直に認めている。A. Kazhdan, *Authors and Texts in Byzantium*, Aldershot, Variorum Reprints, 1993, pp. vii-x. 現在もソヴィエト・ビザンツ史学の遺産を高く評価し、ビザンツの社会経済、軍事、行政史、そして歴史理論について独自の研究を進めているのは、イギリスのJ・F・ハルドンである。彼の理論面での著作には、*The State and the Tributary Mode of Production*, London, 1993などがある。Cf. J. Haldon, “The Feudalism Debate Once More: The Case of Byzantium”, *Journal of Peasant Studies*, 17 (1989), pp. 5-40.
- 27) 邦語では、渡邊金一「ビザンツ封建制の諸問題 論争の展望」、および「プロノイア問題の現況 整理と展望」、『オリエント』20巻1号、1977年、213-228頁を参照。90年代に入って、カジュダンもプロノイア問題の整理を行っている。A. Kazhdan, “Pronoia: the history of a scholarly discussion”, *Mediterranean Historical Review*, 10(1995), pp. 133-163. M.C. Bartusis, *The Late Byzantine Army: Arms and Society, 1204-1453*, Philadelphia, 1992, pp. 157-190も重要。
- 28) オストロゴルスキー、前掲書、112頁。
- 29) 7世紀にビザンツ世界の成立を見る点で、井上浩一氏の『ビザンツ帝国』も、オストロゴルスキーの考えに近い。ただし、氏は文化圏概念を用いて

説明している。一方、オストロゴルスキーは1453年までを叙述するのに対し、井上氏の『ビザンツ帝国』は、「ビザンツ帝国は1204年に滅びたのである」と1204年で唐突に終わる。近年の多く(全てとっていいだろう)の研究が1204年以降のビザンツ的制度と伝統の存続を説いていることなどを鑑みれば、これは極端なやり方といわざるを得ない。井上浩一、前掲書、17-110頁、373頁。Cf. M. Angold, *A Byzantine Government in Exile: Government and Society Under the Laskarids of Nicaea, 1204-1261*, London, 1975; D.M. Nicol, *The Last Centuries of Byzantium, 1261-1453*, 2nd ed., Cambridge, 1993; K.-P. Matschke and F. Tinnfeld, *Die Gesellschaft im späten Byzanz: Gruppen, Strukturen und Lebensformen*, Cologne, 2001, etc. また、ビザンツの政治史研究において、発展と衰退の理解がときに極めて主観的になることを根津由喜夫氏も指摘している。根津由喜夫「十字軍時代のビザンツ帝国」、歴史学研究会編『地中海世界史2、多元的世界の展開』青木書店、2003年、97-134頁、とくに98-99頁。

- 30) 和田氏による後書きによると、オストロゴルスキーの『ビザンツ帝国史』は、日本語訳以前に、セルビア語を皮切りに計7か国語に訳されていたという。確認はしていないが、ビザンツ研究文献の中で最も多くの言語に翻訳されたものと思われる。その評価については賛否両論があるだろうが、世界で最もポピュラーなビザンツの二次文献といってよいだろう。オストロゴルスキー、前掲書、751頁。
- 31) 同、135-138頁、172-173頁、およびG. Ostrogorsky, “The Byzantine Empire in the World of the Seventh Century”, *Dumbarton Oaks Papers*, 13(1959), pp.1-21。オストロゴルスキーは6世紀から7世紀に、土地所有形態の変化、すなわち大土地所有制の崩壊と中小自作農の増加を見る一方、都市生活には断絶を認めなかった。しかし、ローマ末期からビザンツ中期への都市連続説は、今日では支持されなくなっている。G. Ostrogorsky, “Byzantine Cities in the Early Middle Ages”, *Dumbarton Oaks Papers*, 13(1959), pp. 47-66。ビザンツ中期の都市については、W. Brandes, *Die Städte Kleinasiens im 7. und 8. Jahrhundert*, Berlin, 1989が必読文献。英語では、J.F. Haldon, *Byzantium in the Seventh Century*, rev. ed., Cambridge, 1997, pp. 92-124, pp. 459-461が研究状況をうまく整理している。古代末期の都市をめぐる議論は近年活況を呈してい

- る。とりあえず重要なものとして、L. Lavan ed., *Recent Research in Late-Antique Urbanism*, Portsmouth, 2001とJ.H.W.G. Liebeschuetz, *The Decline and Fall of the Roman City*, Oxford, 2001を挙げておく。
- 32) 前世紀半ばに国際学界をにぎわしたテマ制論争についても、渡邊氏が詳細な紹介を行っている。渡邊金一「テマ制度成立の時期をめぐる論争の現況」『史学雑誌』65編10号、1956年、61-79頁、同「テマ論争の新段階」『史学雑誌』68編11号、1959年、76-99頁。テマ制をめぐる問題については、現在、リーリエとハルドンを参照することが不可欠である。リーリエの学説については、R.-J. Lilie, “Thrakien’ und ‘Thrakesion’. Zur byzantinischen Provinzorganisation am Ende des 7. Jahrhunderts”, *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 26(1977), pp. 7-47、および、idem, “Die zweihundertjährige Reform (Zu den Anfängen der Themenorganisation im 7. und 8. Jahrhundert)”, *Byzantinoslavica*, 45(1984), pp. 27-39, pp. 190-201を参照されたい。テマ制に関わる「兵士保有地」の問題については、J.F. Haldon, “Military service, military lands, and the status of soldiers: current problems and interpretations”, *Dumbarton Oaks Papers*, 47(1993), pp. 1-67が最も重要。現在、「ヘラクレイオス改革説」を唱えているのは、アラブ系史家I・シャヒードである。I. Shahid, “Heraclius and the Theme System: new light from the Arabic”, *Byzantion*, 57(1987), pp. 391-406, etc. また、筆者未見であるが、ヘラクレイオス帝については最近2冊の研究書が出版された。W.E. Kaegi, *Heraclius: Emperor of Byzantium*, Cambridge, 2002; G.J. Reinink et als eds., *The Reign of Heraclius, 610-641: Crisis and Confrontation*, Leuven, 2003.
- 33) 昨年、古代末期史家の手によるものではなかったが、わが国で初のブラウンの訳書が刊行された。P・ブラウン著、宮島直機訳『古代末期の世界』刀水書房、2002年（P. Brown, *The World of Late Antiquity, AD 150-750*, London, 1971）。
- 34) ブラウンは、「初期ビザンツ世界における苦行Asceticism in the Early Byzantine World」を主題とした第5回ビザンツ研究スプリング・シンポジウム（1971年、バーミンガム大学）において、「初期ビザンツ世界における聖人の役割 The role of the holy man in the early Byzantine world」と題する発表を行っている。

- 35) Cf. J. Fontaine, "Le culte des saints et ses implications sociologiques: réflexions sur un récent essai de Peter Brown", *Analecta Bollandiana*, 100(1982), pp. 17-41; J. Howard-Johnston and P.A. Hayward eds., *The Cult of Saints in Late Antiquity and the Early Middle Ages: Essays on the Contribution of Peter Brown*, Oxford, 1999.
- 36) 1971年以前の彼の仕事については、P. Brown, *Augustine of Hippo: A Biography*, London, 1967(rev. ed., Berkley, 2000)、および *Religion and Society in the Age of Saint Augustine*, London, 1972を参照されたい。後者は、ブラウンが60年代に発表した論文を集めたものである。
- 37) "The rise and function of the holy man in Late Antiquity", *Journal of Roman Studies*, 61(1971), pp. 80-101 (reprinted in P. Brown, *Society and the Holy in Late Antiquity*, Oxford, 1982, pp. 103-152).
- 38) "A Dark Age crisis: aspects of iconoclastic controversy", *English Historical Review*, 88(1973), pp. 1-34 (reprinted in *ibid.*, 251-301).
- 39) Cf. K. Ringrose, *Saints, Holy Men and Byzantine Society, 726 to 843*, Ph.D. Diss., Rutgers University, 1976; J.F. Haldon, "Some remarks on the background to the iconoclast controversy", *Byzantinoslavica*, 38(1977), pp. 161-84; A. Cameron, "Images of authority: elites and icons in late sixth-century Byzantium", *Past and Present*, 84(1979), pp. 3-35.
- 40) P. Brown, "The rise and function", in: idem, *Society and the Holy*, pp. 105-108.
- 41) P. Brown, "Society and the supernatural: A medieval change", *Daedalus*, 104(1975), pp. 133-151(reprinted in idem, *Society and the Holy*, pp. 302-332); idem., *The Cult of the Saints : Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago, 1981. ブラウンの神判研究については、赤坂俊一「ヨーロッパにおける神判研究史」『西洋史学』171巻、1993年、173-187頁、および同著『神に問う、中世における秩序・正義・神判』嵯峨野書院、1999年に詳しい。
- 42) 「聖人の登場と機能」執筆の思想的背景、とくに人類学の影響については、ブラウン自ら以下の論文で述懐している。P. Brown, "The rise and function of the holy man in Late Antiquity, 1971-1997", *Journal of Early Christian Studies*, 6(1998), pp. 353-376.
- 43) ブラウンが80年代になって研究の方向性を大きく転換させていったことは

重要である。機能主義的な傾向は姿を消し、代わって、言説分析の手法が前面に出てくる。彼自身も認めているように、これはミシェル・フーコーとの知的遭遇が大きく影響している。80年代における彼の最重要の仕事が、初期キリスト教における禁欲的言説の起源と変遷を分析した*Body and Society: Men, Women, and Sexual Renunciation in Early Christianity*, New York, 1988であることに異論はないであろう。

- 44) 1971年以降の聖人研究の高まりを受けて、1980年の第14回シンポジウム(パーミンガム大学)では、「ビザンツの聖人」が共通論題に掲げられ、ビザンツ世界における聖人の問題が幅広く討議された。S. Hackel ed., *The Byzantine Saint*, London, 1981(reprinted, New York, 2001)。イコノクラスム期における修道制と社会の関係を詳細に論じたK・リングローズの研究や、90年代になって出版されたC・ガラタリオトウのキプロスの聖人ネオフュトスについての研究、ビザンツ中期の修道士と修道制に関するR・モリスの研究などは、ブラウン以降の新傾向なしには考えられないだろう。C. Galatariotou, *The Making of the Saint: The Life, Times, and Sanctification of Neophytos the Recluse*, Cambridge, 1991; R. Morris, *Monks and Laymen in Byzantium*, 843-1118, Cambridge, 1994。
- 45) この過程については、前掲の藤縄氏の論文に詳しい。また、西欧における人文学と古典学の制度的展開について書かれた、渡邊金一「ギリシア・ラテン語を学ぶ、とはヨーロッパで何だったのか フールマンの近著に寄せて」『伝説と受容(世界)』、「古典学の再構築」研究成果報告集VI、2003年、53-59頁も参考になる。
- 46) 新ギリシア独立前後から現代にいたるまでギリシアと最も深い関わりを有するイギリスにおいて、ビザンツ研究のための専門機関が最初に設立されたのが1976年と遅く、その設立の地も中世以来の学問的伝統を誇るケンブリッジやオックスフォードではなく、商業都市のパーミンガムであったことは、イギリスにおける伝統的フィルヘレニズムの構造的根強さを物語っているようで興味深い。ちなみに、イギリスで唯一のビザンツ雑誌といえる*Byzantine and Modern Greek Studies*が創刊されたのも比較的最近の1975年であった。また、R・クロググによれば、イギリス議会でギリシアのEC加盟が議論されたとき、当時の外相が「今日のヨーロッパの政治・文化があるのはすべて三千年前のギリシアの遺産のおかげだ。ギリシアの加盟はそのギリシアへの恩返しになる」と発言し、ギリシアのEC加盟を

- 擁護したという。R・クログ、前掲書、7頁。
- 47) カジダンは、早くから新たなビザンツ文化史の必要性を主張したビザンティニストの一人である。文化史、文学史での主要な仕事に、A. Kazhdan, *Vizantiiskaia Kultura: X-XII vv.*, Moscow, 1968(trans. by G. Janke, *Byzanz und seine Kultur*, Berlin, 1976)、idem with S. Franklin, *Studies on Byzantine Literature of the Eleventh and Twelfth Centuries*, Cambridge, 1984、A. Kazhdan with L.F. Sherry and C. Angelidi, *A History of Byzantine Literature, 650-850*, Athens, 1999、A. Kazhdan and G. Constable, *People and Power in Byzantium: An Introduction to Modern Byzantine Studies*, Washington, D.C., 1982、A. Kazhdan and A.W. Epstein, *Change in Byzantine Culture in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Berkley, 1985などがある。1999年の『ビザンツ文学史』が彼の遺著となった。
- 48) 彼女は、ギリシア世界における葬送儀礼の古代から現代にいたる変遷を考察したM. Alexiou, *The Ritual Lament in Greek Tradition*, Cambridge, 1974(rev. ed., Oxford, 2002)で一躍有名になった。昨年には、ギリシアにおける文化的伝統の変遷を言語と神話の点から分析した大著 *After Antiquity: Greek Language, Myth, and Metaphor*, Ithaca, 2002を上梓している。
- 49) P. Magdalino, op.cit.; idem, *The Empire of Manuel Komnenos, 1143-1180*, Cambridge, 1993. 近年のビザンツ政治史研究の特徴は、アナル学派において政治史への回帰といわれる現象と似た性格を持っているといえよう。
- 50) ライウも、現在、世界で最重要のビザンツ研究者の一人といえるだろう。政治史から、経済史、女性史、家族史と、その多岐に及ぶ研究はいずれも重要である。A.E. Laiou, *Constantinople and the Latins: The Foreign Policy of Andronicus II, 1282-1328*, Cambridge, Mass., 1972; idem, *Peasant Society in the Late Byzantine Empire: A Social and Demographic Study*, Princeton, N.J., 1977; idem, *Gender, Society, and Economic Life in Byzantium*, Hampshire, Variorum, 1992; idem, *Mariage, Amour et Parenté à Byzance aux XIe-XIIIe siècles*, Paris, 1992, etc. 昨年には自らが中心となって編集した3巻からなる大著『ビザンツ経済史』が出版された。A.E. Laiou et als. eds., *The Economic History of*

Byzantium: From the Seventh through the Fifteenth Century, 3 vols., Washington, D.C., 2002.

- 51) ブラウンとは異なる視角からビザンツ教会史に取り組んだものとしては、前掲のM. Angold, *Church and Society in Byzantium*をまず挙げねばならない。
- 52) この点、イギリスの支援によって実現したギリシアのECおよびEU加盟は明らかにギリシアに利するものであった。経済的な困難は依然あれども、ギリシア人がEU諸国に留学することは格段に容易になったのである。

小括と展望

COE研究会「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」も昨年11月に発足して以来、9ヶ月を経た。中間総括を行おうとする今、ふりかえてみると、その皮切りのシンポジウム（2002年11月3日）が全てであったように思う。その趣旨と成果は本報告書に述べられている通りであるが、相応しい報告者とコメンテーターを学内外から選び、幾度か打ち合わせをし、議論すべき問題点をリストアップした。結論めいた総括をすることは当初から意図せず、以後の共同研究のための問題発見的な議論の場とすることを目指し、その限りでは成果を収めたといっていよい。そこで実際に行われた議論や発言は文書にまとめられ、その後の研究会における議論の拠り所となった。またこのシンポジウムの成果は、以後の研究会の積み重ねによって深められ、共有された認識をもとに、本年中に書物（谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社）として公にされることになっている。

ヨーロッパ・アイデンティティとはヨーロッパ史において、成長する人間の自意識のように徐々に現れるというものではない。それはある文化的レベルを持つ人々が、他者との接触と交渉において、また自身の地位の動揺と危機において生み出す独特の意識である。したがってヨーロッパ・アイデンティティの特質は、他者認識に触発され、また現状認識に媒介された、ヨーロッパ人自身のヨーロッパ史像に何よりも明確に現れる。ヨーロッパ・アイデンティティはすぐれて歴史的な意識である。シンポジウムと研究会において確認されたのは、この意味でのヨーロッ

パ・アイデンティティは、研究対象の時期をとわず、ヨーロッパ史研究者にとって、避けて通れぬ問題だということである。

「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」研究には、いまひとつ、過去の諸時期における様々な地域・民族・国家のアイデンティティ複合を明らかにするという課題がある。この課題への取り組みは、文化共同体としてのヨーロッパ、地理的枠組みとしてのヨーロッパを再考し、EU統合と密接に関連する統一ヨーロッパのイメージ(戦略)を相対化することにつながるであろう。

この二つの視点を持って、古典古代から近・現代に及ぶヨーロッパ史の問題を検討するのが、本研究会の課題であった。9ヶ月の間の研究において私たちは、こうした視点に立ち、近代ヨーロッパの古代ギリシア観、アメリカ人のヨーロッパ認識、イスラムとヨーロッパの相互認識、東中欧のアイデンティティ、EU拡大と東欧など、様々なテーマに関する報告を得て議論を積み重ねることにより、格段に新しい認識の地平を拓いたものと自負する。今後は9月と3月にヨーロッパの研究者を迎えてシンポジウムを開く予定である。これまでに得た知見を確認し、豊富化する機会としたい。(服部 良久)